

学生よ野望を抱け

希望ある未来を描く大学教育ビジョン

【参考資料】

高等教育の未来を考える会

2022年12月

ベネッセ教育総合研究所

◆【参考資料】について

【2】

●この【参考資料】の位置づけ

- この【参考資料】は、ベネッセ教育総合研究所が有識者とともにおこなった「高等教育の未来を考える会」がまとめた提言書『学生よ野望を抱け—希望ある未来を描く大学教育ビジョン』を検討する際に背景となった資料やデータを掲載しています。
- 大学をとりまく環境は刻々と変わり、それに応じて教育政策の動向が定められ、さまざまな改革が行われてきました。大学教育の変化は著しく、大学生の意識や行動もかつてとは様変わりしています。この【参考資料】では、そうした状況を理解するために、大学をとりまく環境、教育政策の動向、大学教育の変化、大学生の意識や行動にかかわる資料やデータを取り上げています。

●「提言書」について

- 提言書『学生よ野望を抱け—希望ある未来を描く大学教育ビジョン』では、新しい価値を創造する人材を育成するために、大学が学生にとってどのような場になるとよいかについて4つの提言を行っています。

高等教育の未来を考える会
4つの提言

- ①挑戦と観察を繰り返して創造性を育む学び場へ
- ②学生が自身で決定し評価する経験ができる場へ
- ③社会と学生自身がつながる経験を提供する場へ
- ④未来を学生自身が変える目標と実感を育む場へ

- この【参考資料】とあわせて、「提言書」を是非ご覧ください。
URL : <https://berd.benesse.jp/opinion/>



◆【参考資料】の構成

【3】

	Part I 大学をとりまく環境 4
	<p>大学をとりまくさまざまな社会環境の変化についてのデータを紹介</p> <p>大学をとりまく環境の変化 5/日本の人口予測 6/出生数の予測 7/目指される社会—Society5.0 8/持続可能性—SDGs 9/地域における大学の役割 10/大学進学率(都道府県別) 11/外国人 留学生の割合 12/25歳以上の入学者の割合 13/人生100年時代 14</p>
	Part II 教育政策の動向 15
	<p>初等中等教育から高等教育までの教育政策の動向に関する資料を掲載</p> <p>学力の3要素 16/初等中等教育における学びの変化 17/高校教育課程の改訂 18/探究における 生徒の学習の姿 19/小学生~高校生の学びの様子 20/探究学習の内容 21/探究学習のテーマ 22/大学関連の答申や政策の流れ 23~25/グランドデザイン答申 26/答申における「創造力」 27</p>
	Part III 大学教育の変化 28
	<p>入試、授業、カリキュラム、成果の可視化などの大学教育にかかわるデータを解説</p> <p>入学者選抜の変化 29/私立大学の入試状況 30/入試の好事例 31/大学の授業の形態 32/オ ンライン授業 33/大学による支援 34/3つの方針に基づいた点検 35/カリキュラム編成上の工夫 36/初年次教育の実施状況 37/学修成果の可視化 38</p>
	Part IV 大学生の意識や行動 39
	<p>大学での学びや生活の様子、社会に対する意識などのデータを提示</p> <p>大学進学理由 40/力を入れたこと 41/授業に対する取り組み 42/生活時間(1週間あたり) 43/ 学内の友人関係 44/身についた資質・能力 45/大学教育観 46/保護者との関係 47/大学満足 度 48/学びの充実度 49/成長実感 50/高大社での学びと「幸せな活躍」 51/自国の将来に対す る意識 52/自分と社会のかかわりについて 53/Z世代の特徴 54</p>
	Part V 最後に 55
	<p>大学1~2年生での学びの重要性をまとめ、「提言書」を紹介</p> <p>大学1~2年生の意味 56/「提言書」の紹介 57/「提言書」の主な内容 58/高等教育の未来を考 える会メンバー 59</p>



Part

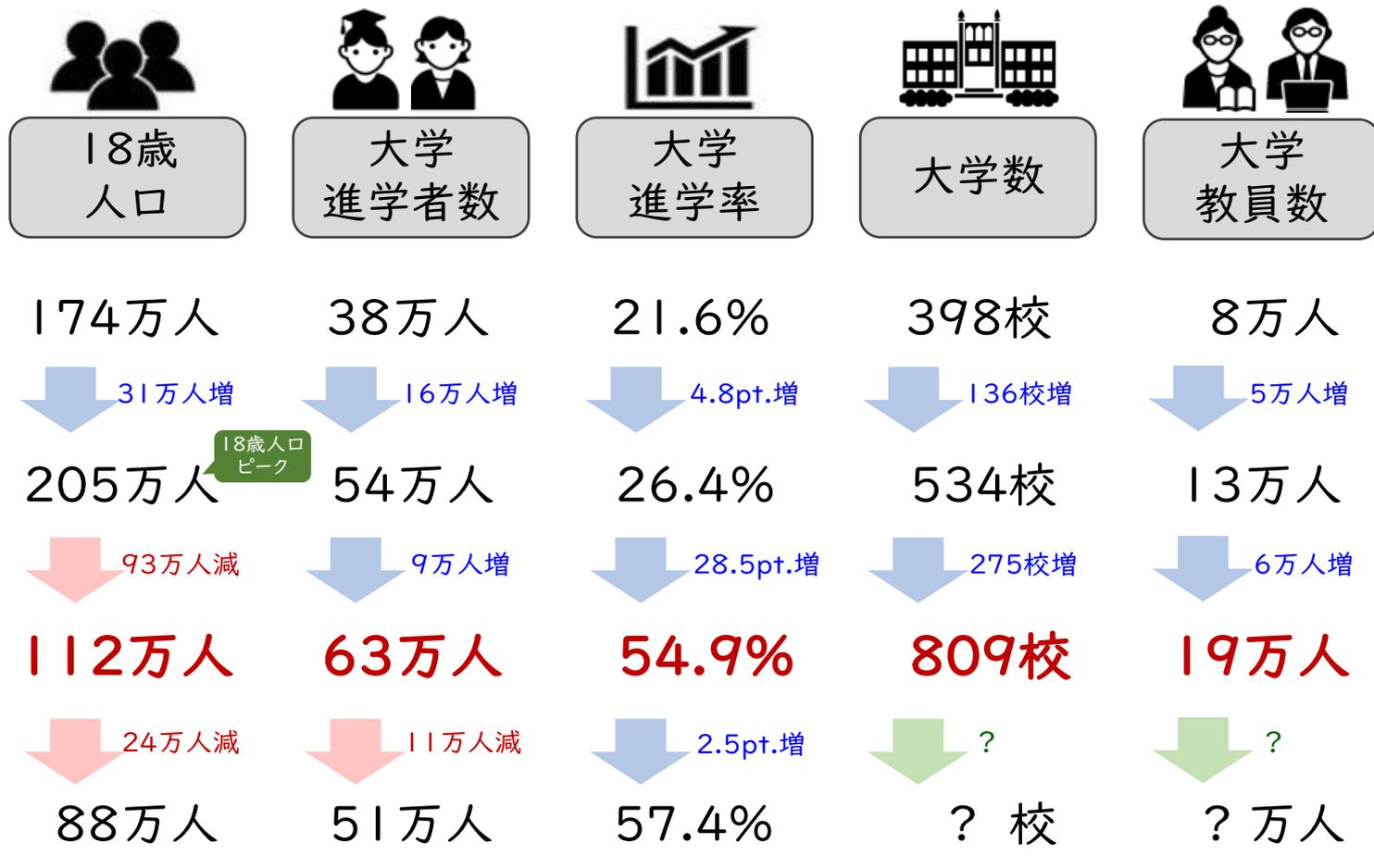
I

大学をとりまく環境

I-1 ◆ 大学をとりまく環境の変化

【5】

● 18歳人口が減少に転じても、大学進学者数は増加し続けてきた



※1972年、92年の数値は文部科学省「学校基本調査」、2022年の数値は推定値（一部は2021年の数値を引用）、2040年の数値は文部科学省「大学進学者数等の将来推計について」より引用して作成した。

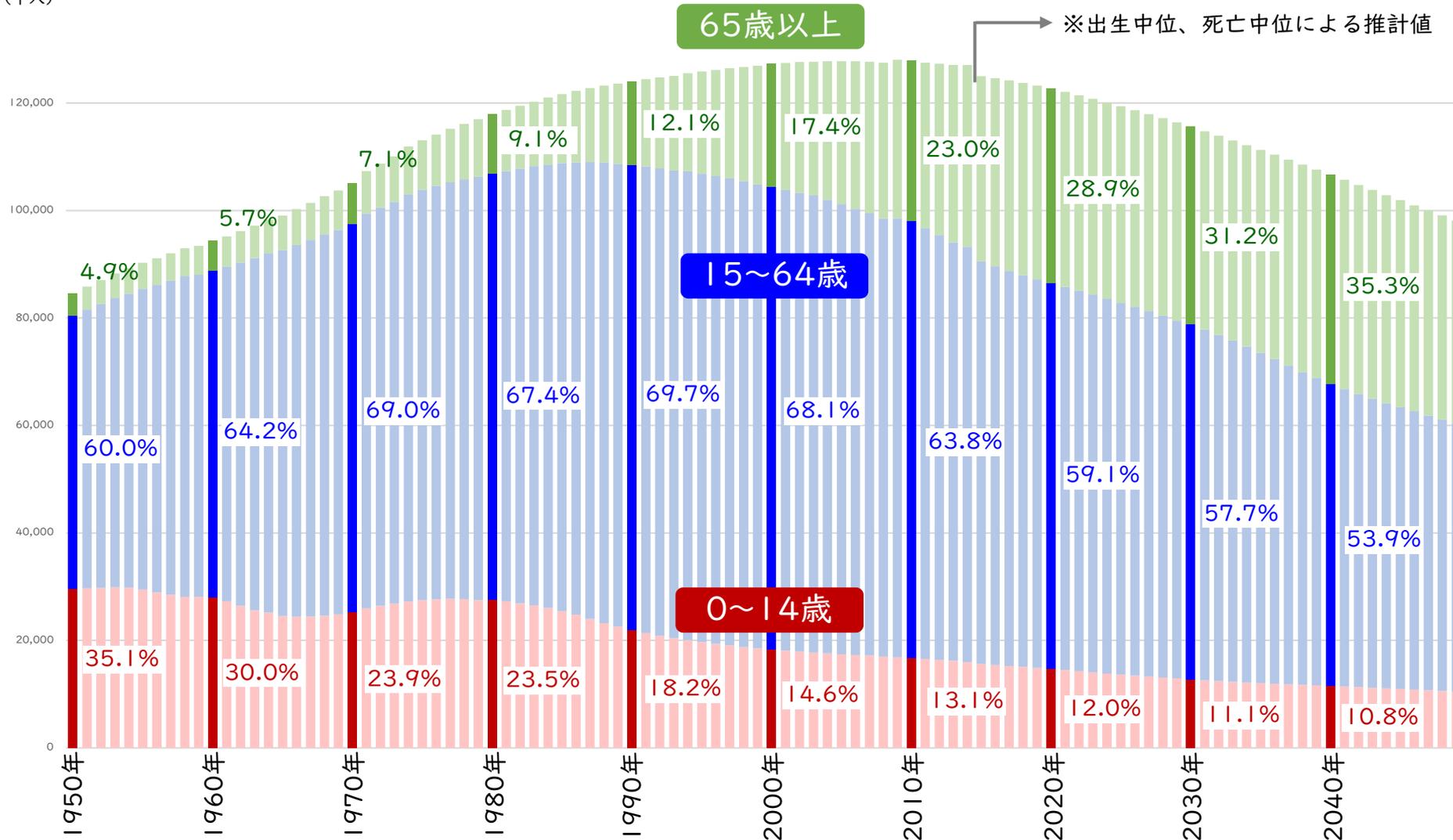
◆ この間、大学数も増え続け、私立大学の半数近くはすでに定員割れである

I-2◆日本の人口予測

【6】

●年少人口（0-14歳）や生産年齢人口（15-64歳）が減り、老年人口（65歳以上）が増える

(千人)



※国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成29年推計）より作成

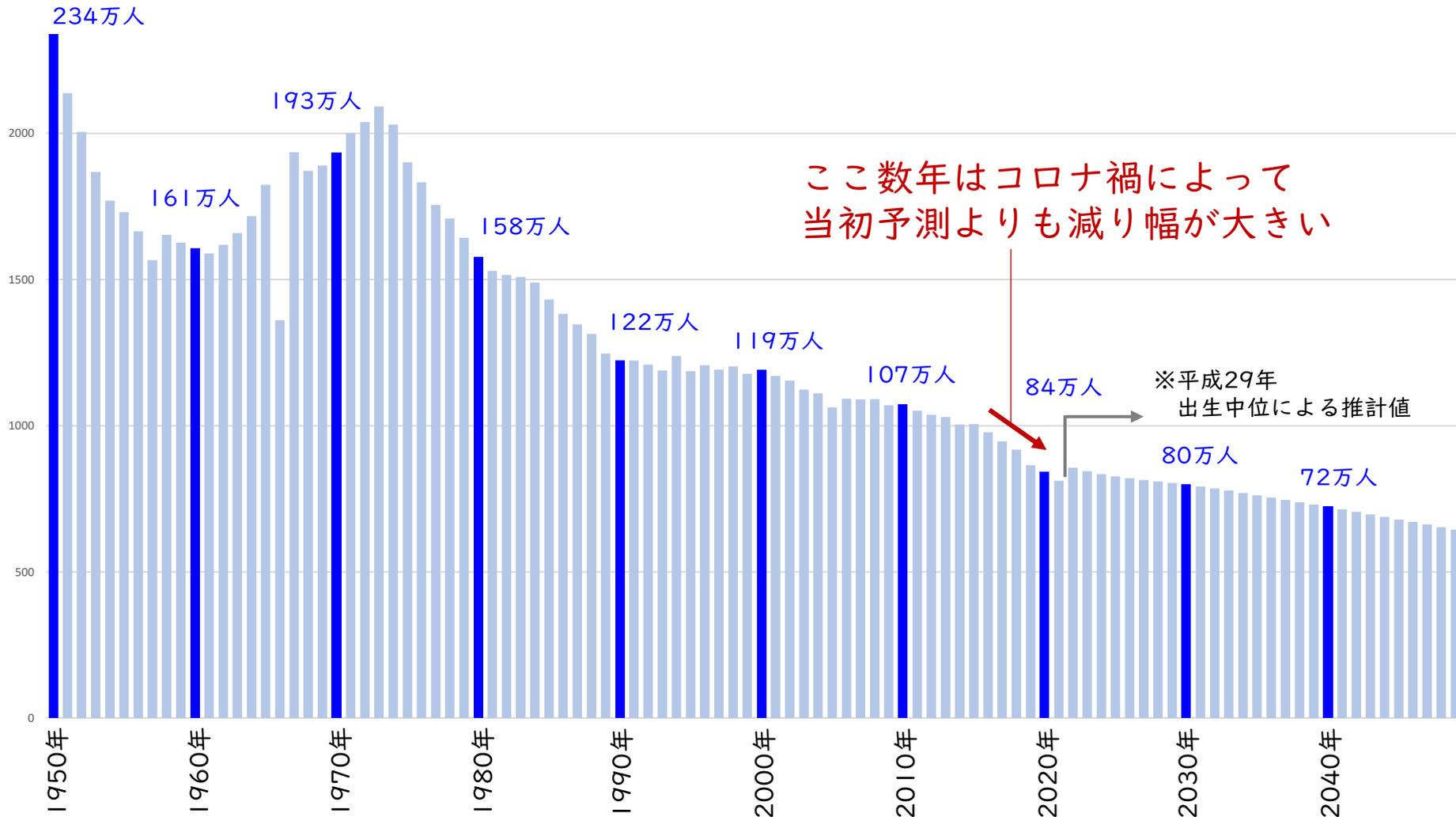
I-3◆出生数の予測

【7】

●出生数は毎年1%（1万人弱）程度ずつ減り続ける予測

(千人)

2500



※国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成29年推計）より作成

I-4◆目指される社会—Society 5.0

【8】

●新たな価値の創出により、経済発展と社会的課題の解決の両立を目指す



内閣府作成

※内閣府作成のホームページより転載 (https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/)

◆大学が「次の社会の創造」に果たす役割は大きい

I-5◆持続可能性—SDGs

【9】

●世界共通で「持続可能な開発目標」の実現が目指されている

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



※国際連合のホームページより転載 (<https://www.unic.or.jp/>)

◆大学には、さまざまな社会的な課題を解決する人材の育成も期待される

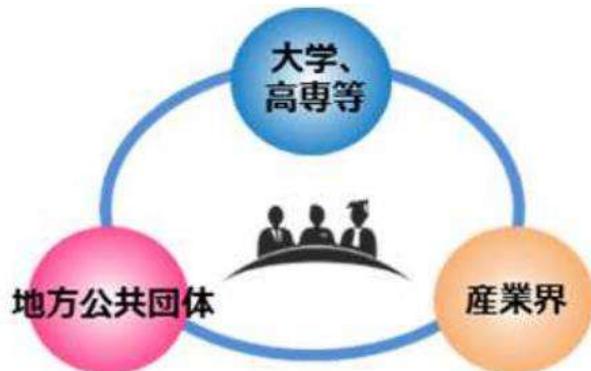
I-6◆地域における大学の役割

【10】

●人口減少が進むなかで、地方における質の高い教育機会の確保が課題に

- ◆大学等は地域の人材を育成し、地域経済・社会を支える基盤。各地域は、人口減少、産業構造の変化、グローバル化、一極集中型から遠隔分散型への転換の中で、地域ニーズを踏まえた質の高い教育機会の確保と人材の育成がこれまで以上に重要。
- ◆地域においてもデジタル革命など新しい産業創出やイノベーションを生み出し、地域経済・社会を革新的に変えるチャンス。

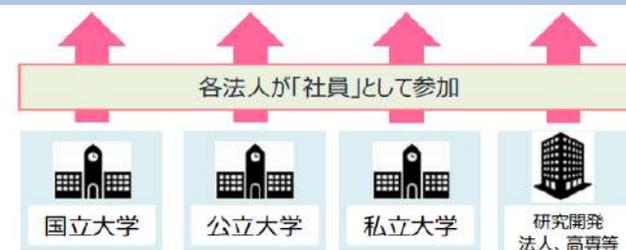
地域連携プラットフォームの構築



地域の国公立大学等、地方公共団体、産業界等が一体となった恒常的な議論の場を構築し、連携体制の強化。地域人材の育成や課題解決に向けて取り組む。

大学等連携推進法人の認定制度

(一般社団法人)〇〇地域大学ネットワーク機構



多様化するニーズや社会からの要請に応えるため、各大学等が強みや特色を生かしつつ、一定の地域や特定分野で他大学等と連携・協力して教育等に取り組む。

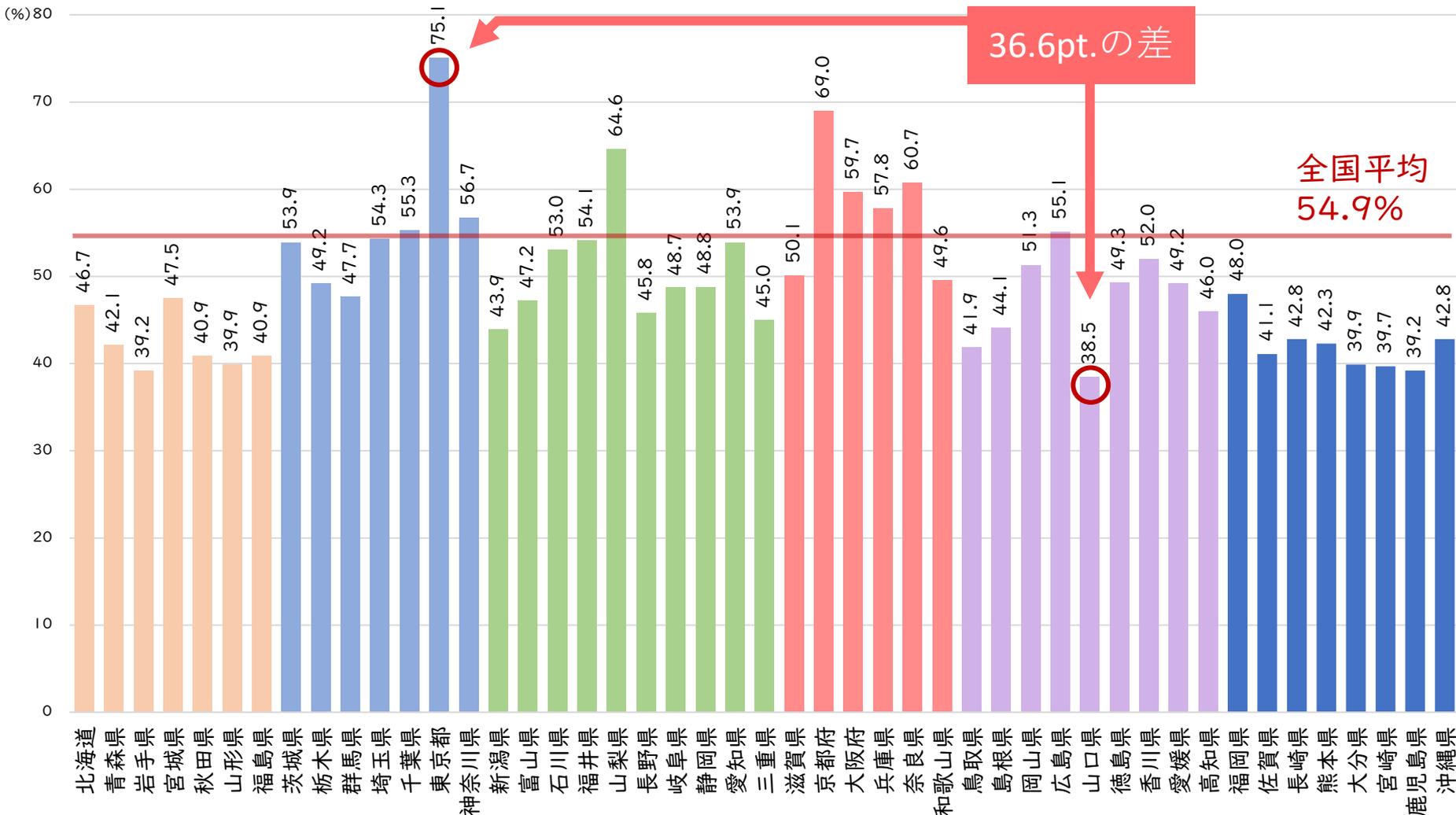
※文部科学省「地域連携プラットフォームの構築」資料より抜粋して作成

◆地域内での各教育機関、産業界、行政との連携が必要となる

I-7◆大学進学率（都道府県別）

【11】

●居住する地域によって大学進学率が大きく異なる



※文部科学省『学校基本調査』2021年データより作成

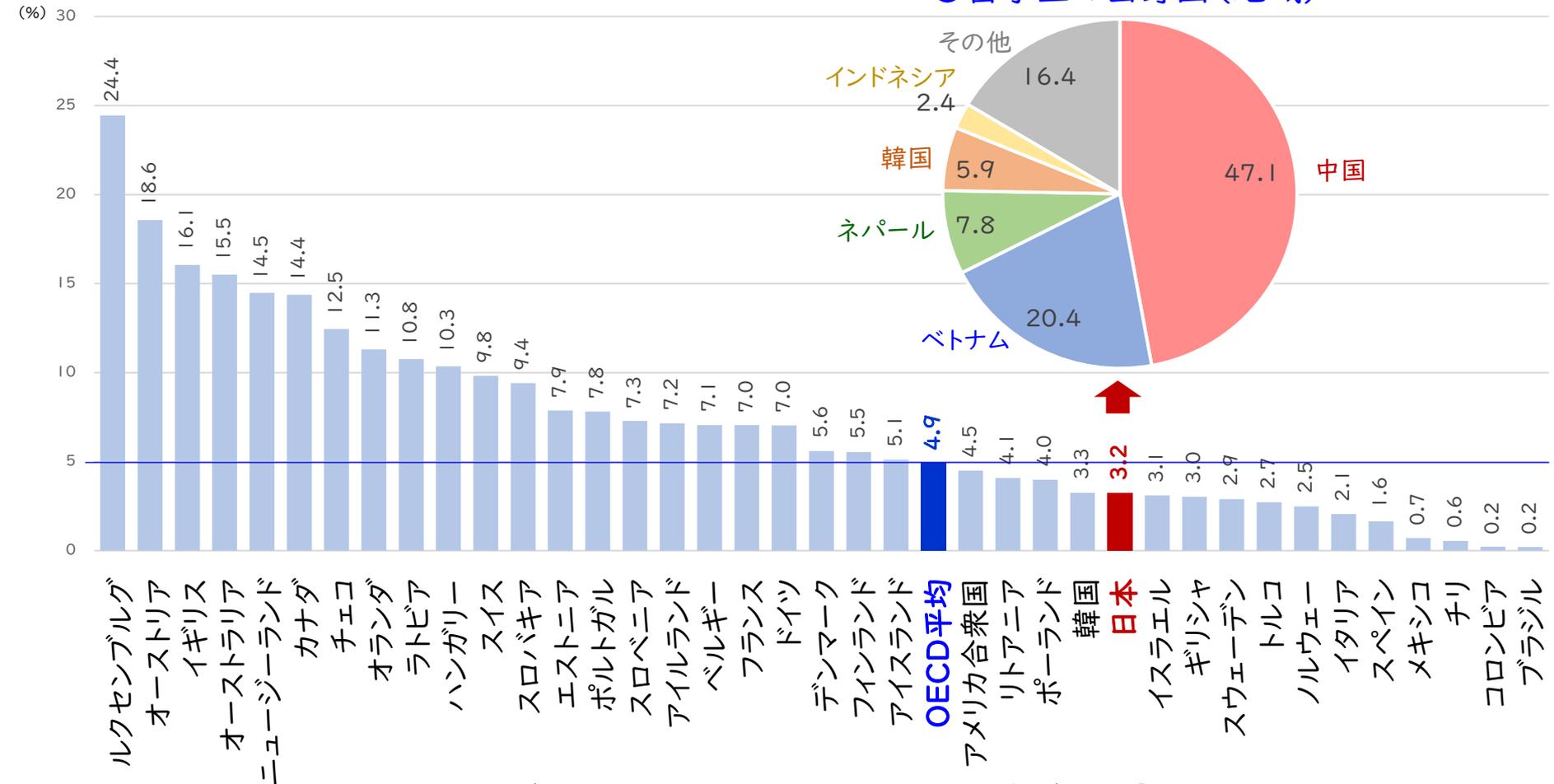
◆それぞれの地域の産業振興や地域を支える人材育成に対する期待も大きい

I-8◆外国人留学生の割合

【12】

● 学士課程入学者のうち留学生の比率は3.2%で、OECD平均よりも低い

● 留学生の出身国(地域)



※棒グラフは、OECD Education at a Glance (2022)。データは、「学士課程」入学者、2020年のもの

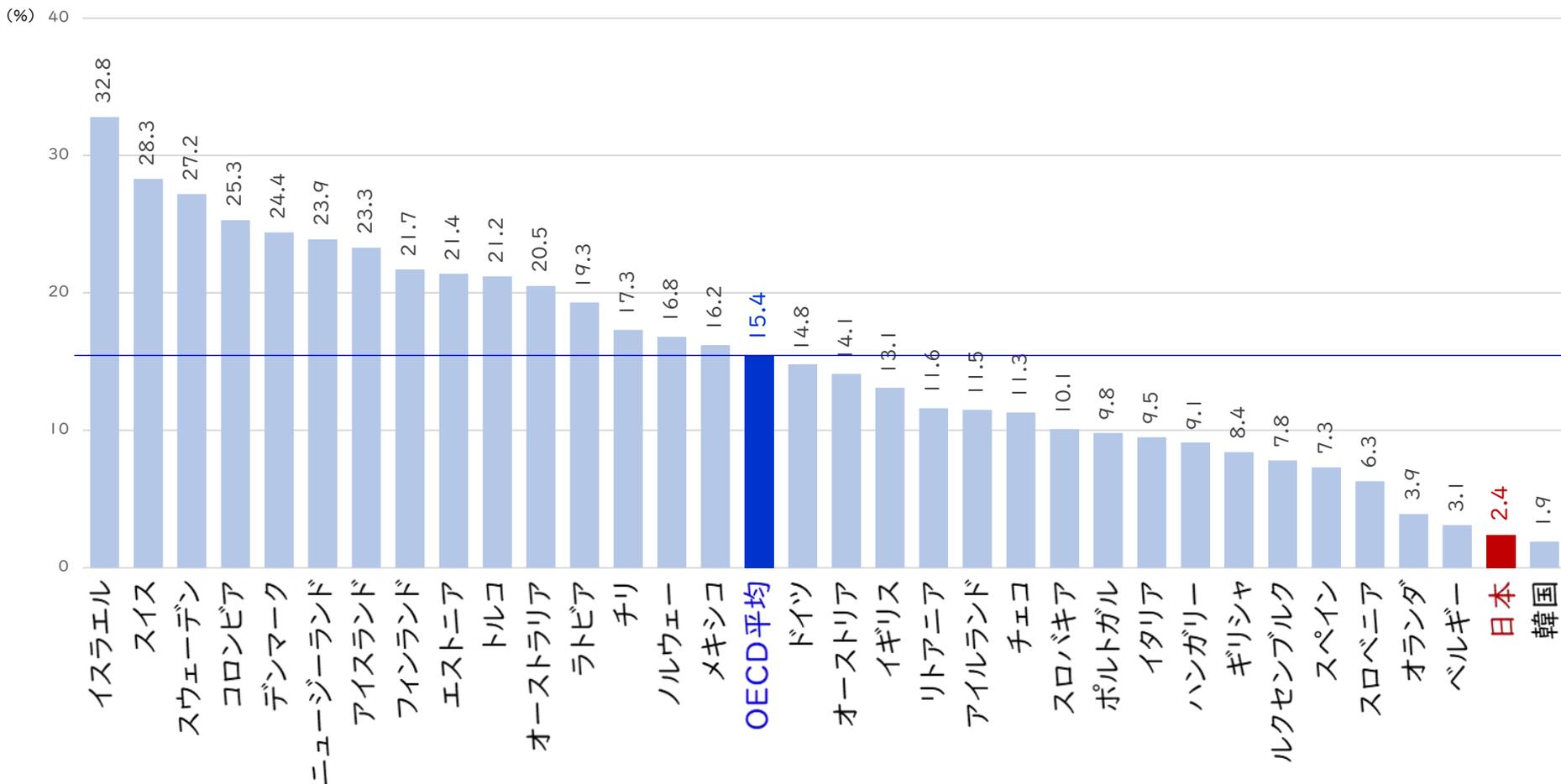
※円グラフは、(独)日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」2021年。留学生の総数は242,444名

◆ 留学生の比率が低く、大学をいかに国際化していくかにも課題がある

I-9◆25歳以上の入学者の割合

【13】

●日本は25歳以上で「学士課程」に入学する学生の割合が低い



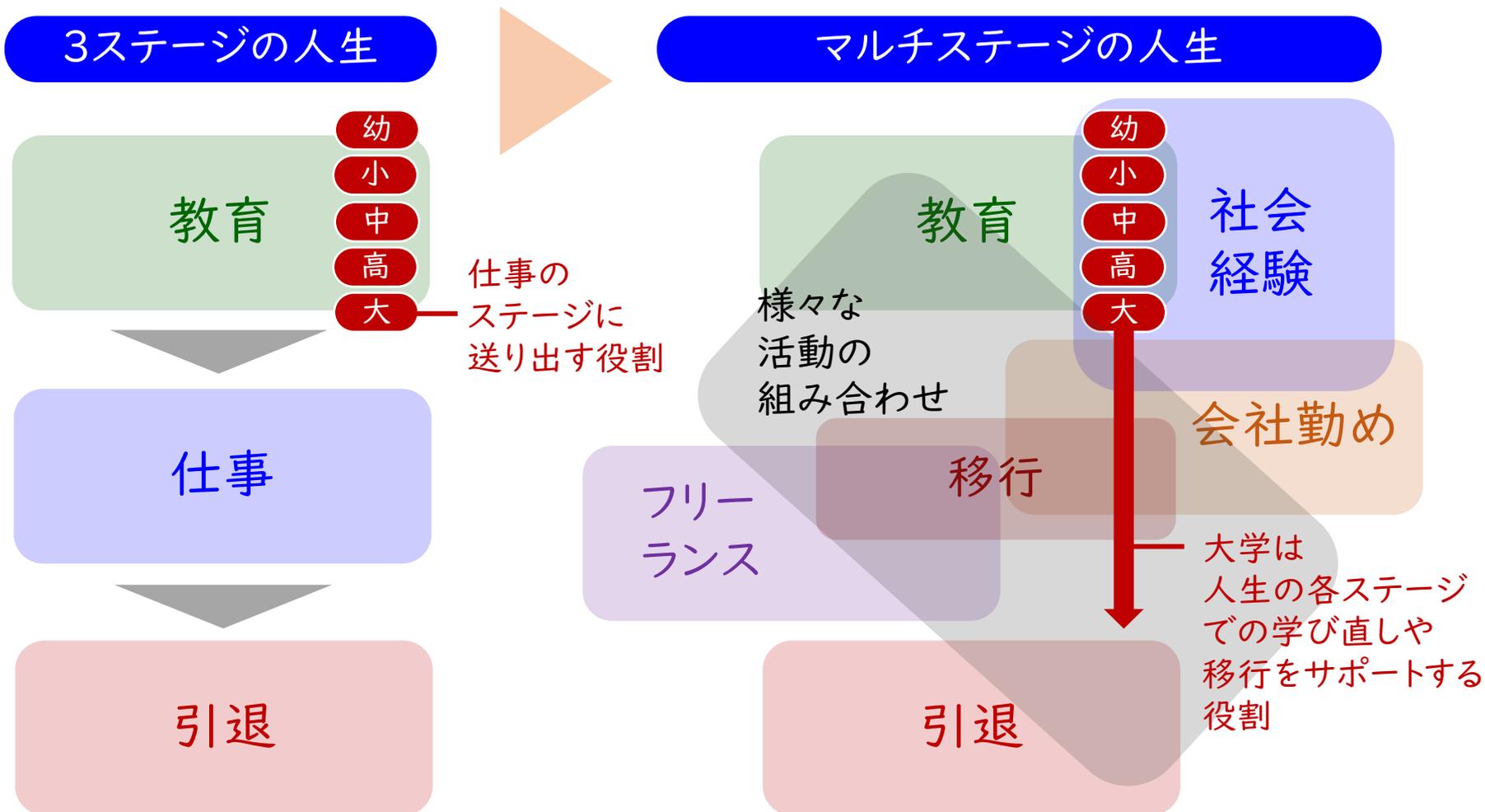
※OECD Education at a Glance (2019) (諸外国) 及び「平成29年度学校基本統計」(日本)
データは2017年のもの。日本以外の諸外国の数値については、学士課程の初回入学者の割合

◆大学を生涯学習や学び直しの中核として機能させることが求められる

I-10◆人生100年時代

【14】

●3ステージの人生モデルから、マルチステージの人生モデルに変わる



※図はリンダ・グラットン、アンドリュー・スコット『LIFE SHIFT-100年時代の人生戦略』（東洋経済新報社、2016年）を参考に作成

◆誰がいくつになっても学び直し、活躍できる社会を創る必要がある



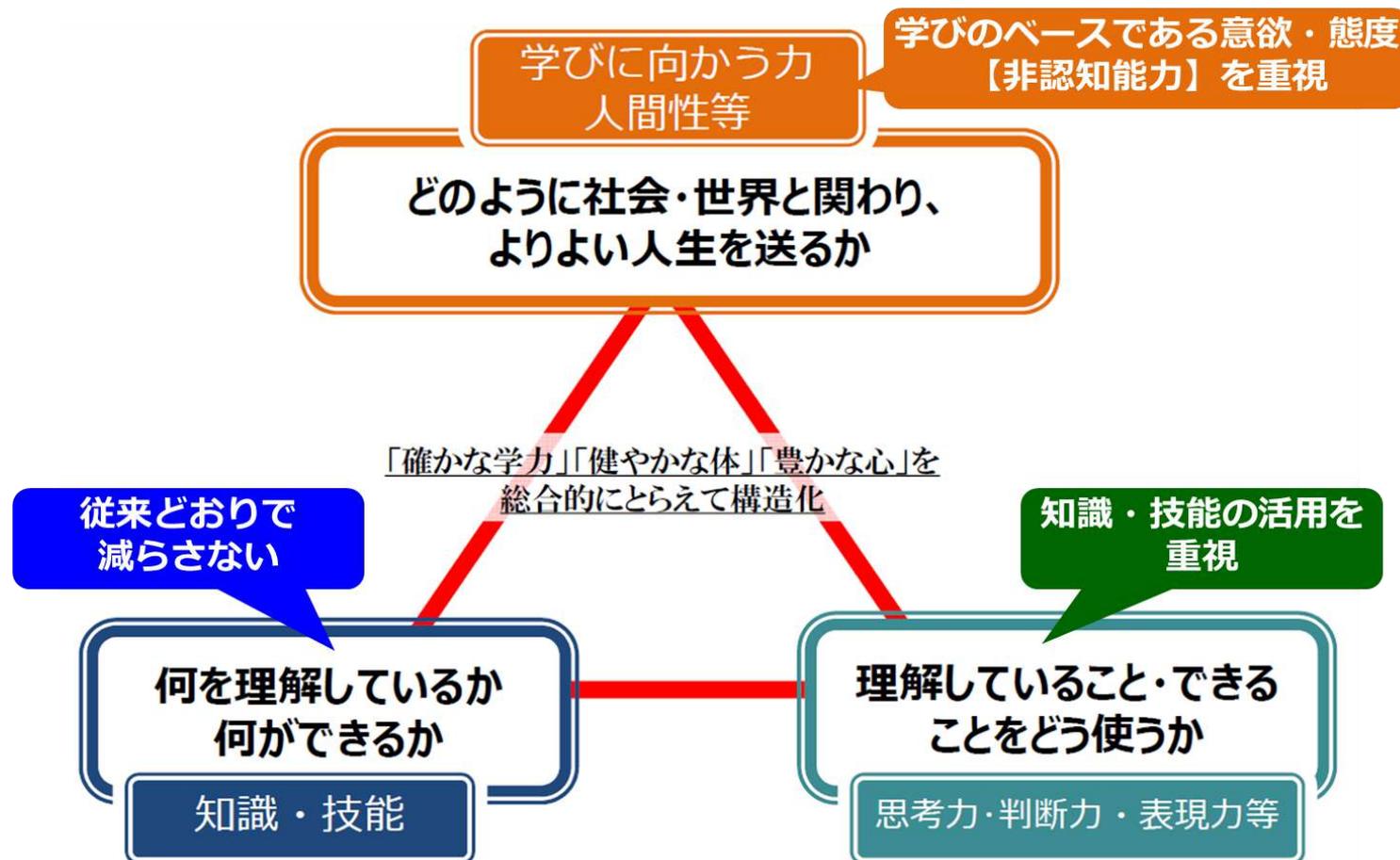
Part

II

教育政策の動向

Ⅱ-1 ◆学力の3要素

- 文部科学省は3つの領域で育成すべき資質・能力を整理



※文部科学省の資料を基に作成

- ◆この学力の3要素は、幼児教育から高等教育まで一貫して育成・評価が必要

Ⅱ-2◆初等中等教育における学びの変化

【17】

●学力の3要素を育成するために「主体的・対話的で深い学び」を実施

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにする。

【主体的な学び】の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。



主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に
生かそうとする
学びに向かう力・
人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の
習得

未知の状況にも
対応できる
思考力・判断力・表現力
等の育成



【深い学び】の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。



【対話的な学び】の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。

Ⅱ-3◆高校教育課程の改訂

【18】

●高校では2022年から新学習指導要領が実施されている

1.改訂の基本的な考え方

- 未来社会を切り拓くための資質・能力を育成→「社会に開かれた教育課程」を重視
- 知識・技能の習得と思考力・表現力・判断力の育成のバランス重視（継続）
- 高大接続改革（高校教育改革、大学教育改革、入試改革）を意識した改訂

2.主体的・対話的で深い学びの実現

- 生涯にわたって探究を深める未来の創り手として社会に送り出す

3.カリキュラム・マネジメントの確立

- 教科横断的な学習の充実、習得・活用・探究のバランスの工夫

4.教科・科目構成の見直し

- 国語→現代の国語、言語文化、論理国語、文学国語、国語表現、古典探究に再編
- 地歴→地理総合、地理探究、歴史総合、日本史探究、世界史探究に再編
- 公民→公共、倫理、政治・経済に再編
- 数学→数学Cが新設（復活）
- 外国語→英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ、論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに再編
- 情報→情報Ⅰ、Ⅱに再編
- 理数→理数探究基礎、理数探究が新設
- 総合→総合的な探究の時間に

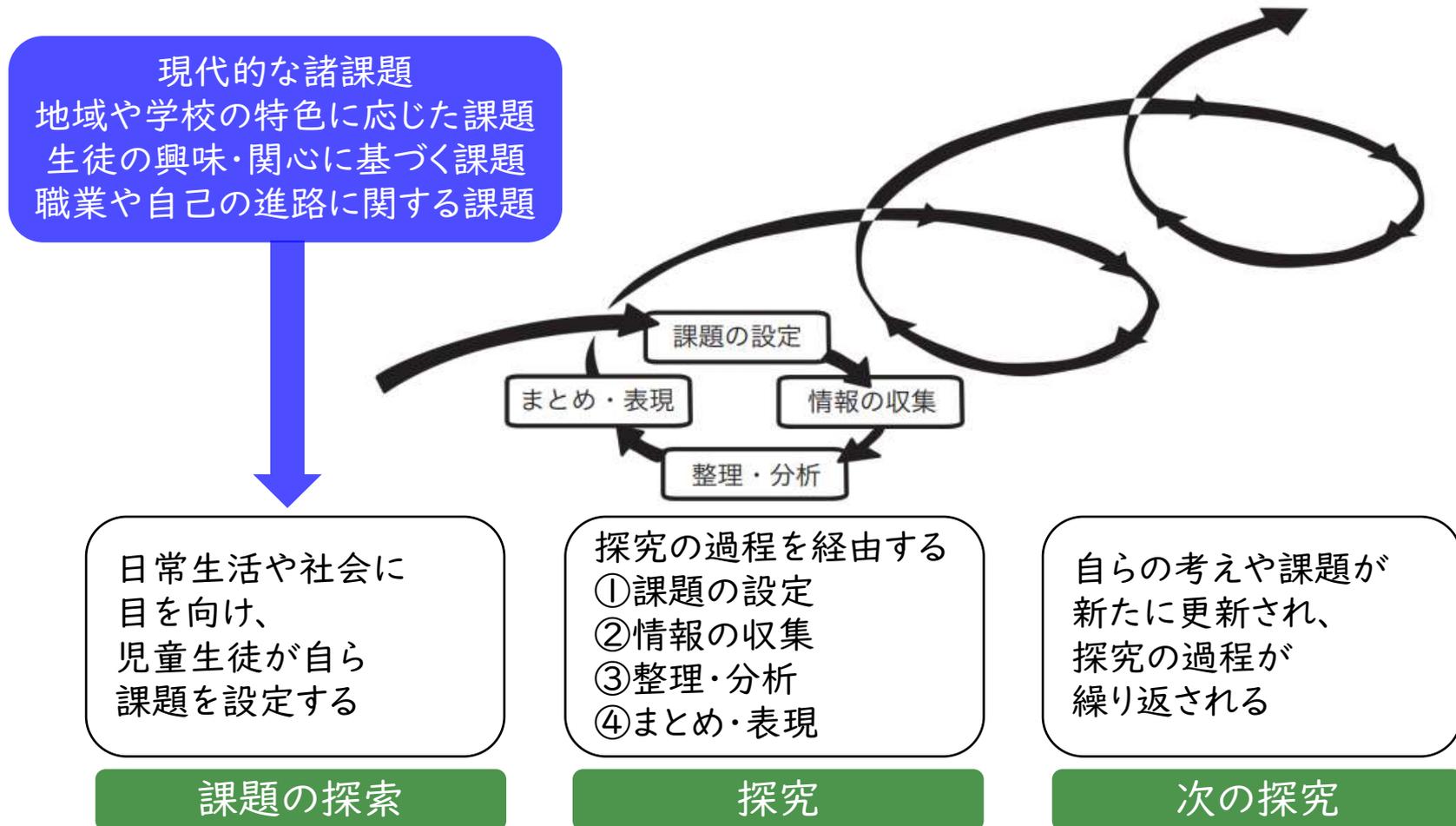
※文部科学省の資料を参考に作成 (https://www.mext.go.jp/content/1421692_2.pdf)

◆各教科の「見方・考え方」を教科横断で働かせる探究的な活動が増える

Ⅱ-4◆探究における生徒の学習の姿

【19】

●探究活動では、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成



※図は学習指導要領（平成29年告示）「総合的な学習の時間編」解説より一部改変 ※小中高共通

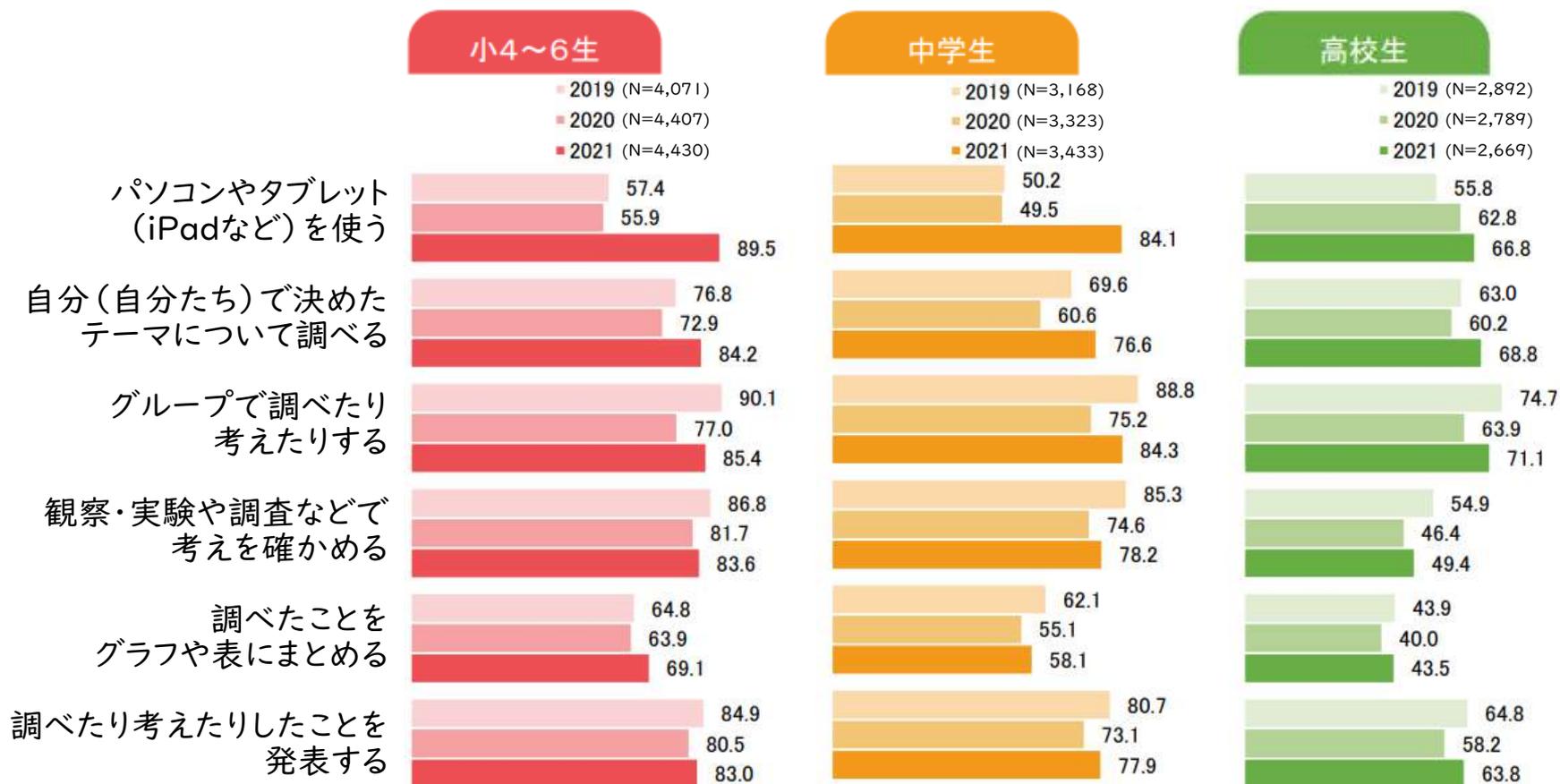
◆新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う

Ⅱ-5◆小学生～高校生の学びの様子

【20】

●「テーマ学習」「グループ学習」などは7～8割の子どもが経験している

◆この1年くらいの間に、学校の授業で、次のようなことはどれくらいありましたか。



※「よくあった」+「ときどきあった」の合計(%)

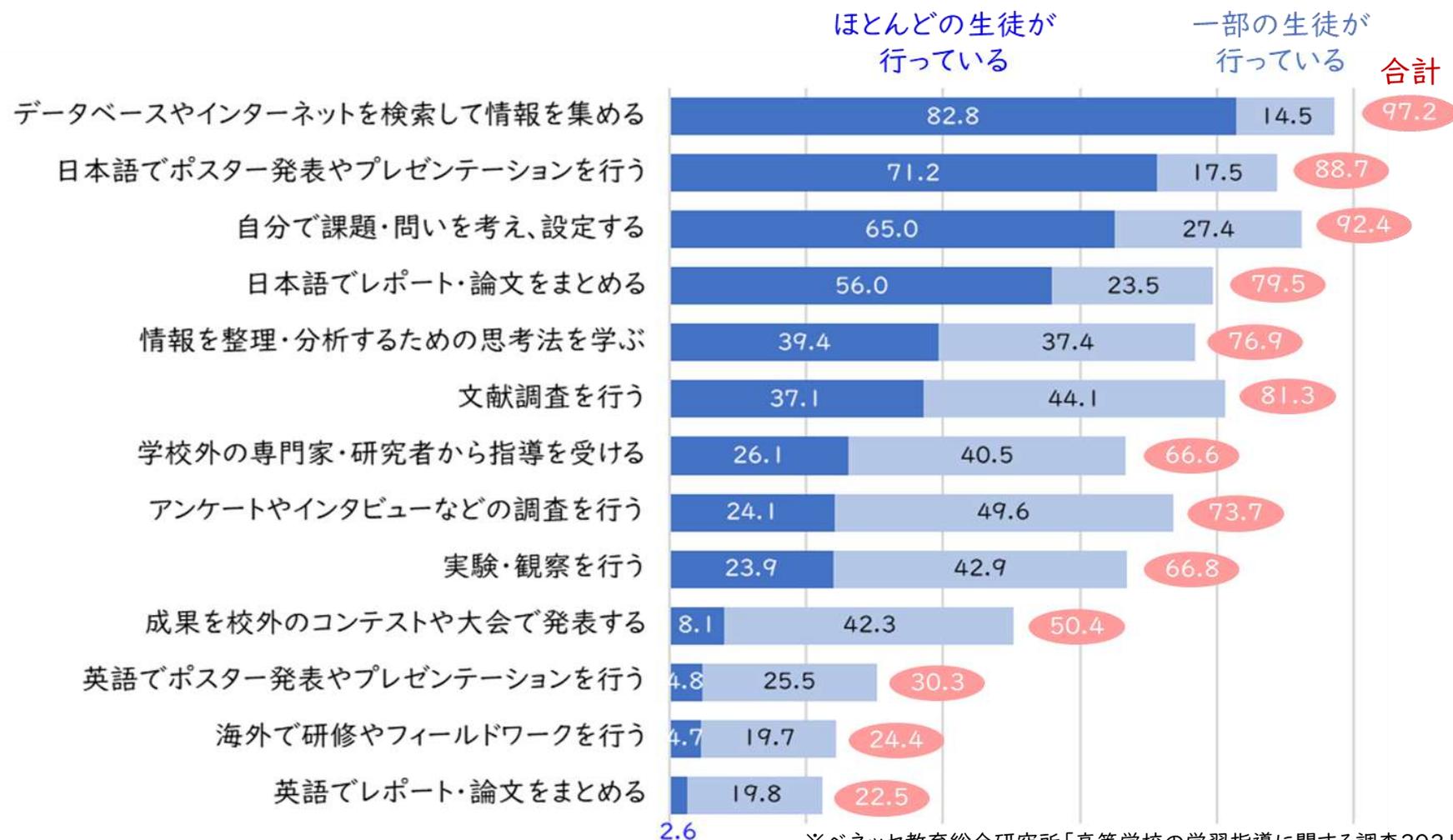
※東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2021」

◆2020年にコロナ禍の影響で減少した活動も、2021年には回復している

Ⅱ-6◆探究学習の内容

●多くの高校で、情報検索、発表、課題設定、論文作成が行われている

◆探究活動のなかで、どれくらいの生徒が次のような活動を行っていますか。(%)



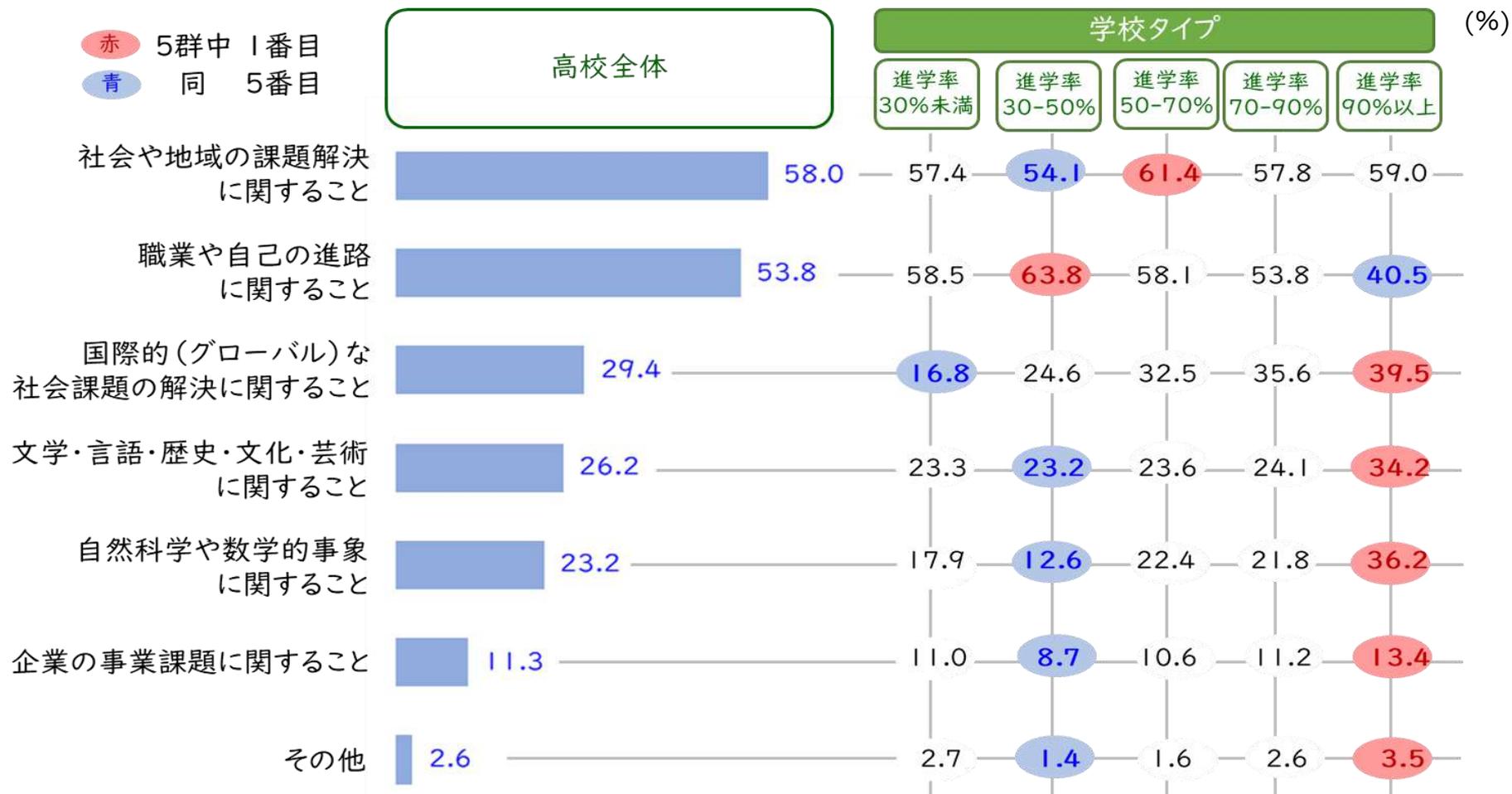
※ベネッセ教育総合研究所「高等学校の学習指導に関する調査2021」
※探究学習を「指導している」高校教員1,597名の回答を分析

Ⅱ-7◆探究学習のテーマ

【22】

●「社会や地域の課題解決」「職業や自己の進路」が半数を超える

◆あなたが指導している探究活動では、主にどのような課題に取り組んでいますか。



※ベネッセ教育総合研究所「高等学校の学習指導に関する調査2021」
※探究学習を「指導している」高校教員1,597名の回答を分析

Ⅱ-8◆大学関連の答申や政策の流れ①

【23】

●「基準の大綱化」と「自己点検・評価による質の向上」の2つの潮流が生まれる

年	答申・政策名	教育課題→答申・政策の概要
1956年	●大学設置基準(省令)	●学校教育法に基づき設置基準を定める必要 →大学設置の 必要最低基準 を設定
1971年	●四六答申 今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本施策について	●大学紛争、科学技術進展、高等教育の大衆化 →教育の 多様化 (総合領域型、専門体系型、目的専修型の分類)、 生涯学習体系 への移行、管理運営体制の合理化
高等教育の大衆化を受けて、教育の多様化と生涯学習体系への移行を目指す		
1987年	●臨教審答申	●学歴主義による画一性・硬直性・閉鎖性の打破 → 個性重視の原則 、選抜制度の改革、国際化
生涯学習の場として自由で開かれた高等教育の実現を提言		
1991年	●大学教育の改善について (大学審議会答申)	●個性化・多様化の必要= 大学設置基準の大綱化 →科目の区別撤廃(一般教養の解体) →大学の 自己点検・評価 システムの導入
<div style="background-color: red; color: white; padding: 5px; display: inline-block;">注目</div> 基準の大綱化(自由化)と自己点検・評価による質の向上の両立		
1997年	●高等教育の一層の改善について (大学審議会答申)	●カリキュラム改革、教育方法・評価の改善の必要性 →大学の 理念・目標の明確化 、 教養教育の重要性 の再確認、 学習効果 を高める工夫
学部教育の質の確保や学生の質の保証を実現する改革の必要		

Ⅱ-8◆大学関連の答申や政策の流れ②

【24】

●主体的な学修を促す教育の質的転換とPDCAサイクルの確立へと展開

年	答申・政策名	教育課題→答申・政策の概要
1998年	●21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学(大学審議会答申)	●教育の不十分さ(一方通行型講義、安易な単位認定など) →課題探求能力の育成、教育研究システムの柔構造化、責任ある意思決定と実行、多元的な評価
社会の高度化・複雑化を受けて、教養教育と専門教育の有機的な連携を提言		
2000年	●大学入試の改善について(大学審議会答申)	●多様な大学教育実現のための選抜制度の見直し →アドミッション・ポリシーの作成、能力・適性の多面的な評価、AO入試の推進、やり直しがきくシステム
受験生の能力、適性、意欲、関心を多面的、総合的に評価する選抜への転換		
2008年	●学士課程教育の構築に向けて(中央教育審議会答申) 学士課程答申	●「21世紀型市民」育成の必要 →学士力の明確化、学修成果の重視 知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力 →3ポリシーに貫かれた教学経営とPDCAの確立 →教職員の職能開発(FD・SD)
目標(3ポリシー)を明確にし、PDCAサイクルを確立してアカウンタビリティを実現		
2012年	●新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 質的転換答申 (中央教育審議会答申)	●学士課程教育の質的転換の必要 →能動的学修の推進、学修時間の増加 →学位プログラム体系化、シラバス、教学マネジメント
多様な資質・能力を育成するために主体的な学修を促す教育の質的転換が必要		

注目

注目

II-8◆大学関連の答申や政策の流れ③

【25】

●学修者本位の教育を実現するため、「質保証」がさらに求められるように

年	答申・政策名	教育課題→答申・政策の概要
2014年	●新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（中央教育審議会答申）	<ul style="list-style-type: none"> ●「従来型学力」に偏重する教育・選抜の見直し →高校教育・入学者選抜・大学教育の三位一体改革 →学力の3要素の育成と多面的・総合的な評価 →新テストの導入（合教科・科目型、総合型問題、記述式） →英語4技能の測定
学力の3要素の育成と評価を実現するために、入試制度の改革を提言		
2016年	●高大接続システム改革会議「最終報告」	<ul style="list-style-type: none"> ●2014年中教審答申の具体案 高等学校基礎学力テスト、大学入学希望者学力評価テスト
2018年	●2040年に向けた高等教育のグランドデザイン グランドデザイン答申 （中央教育審議会答申）	<ul style="list-style-type: none"> ●将来展望から高等教育のあり方を検討する必要 →学修者本位の教育への転換 →教育の質保証と情報公開（学修成果の可視化など） →多様性と柔軟性（リカレント、国際化、教員の多様化など）
学修者本位の教育を実現するために「質保証システム」の確立を目指す		
2020年	● 教学マネジメント指針 （中央教育審議会大学分科会）	<ul style="list-style-type: none"> ●「3ポリシー」に基づく大学運営の実現 →学修目標の具体化、目標に沿った教育課程の実施 →学修成果・教育成果の把握・可視化と情報公開 →教学マネジメントを支える基盤（FD・SD、教学IR）
大学が質の高い教育を実現するためのマネジメントのあり方を提示		

注目

Ⅱ-9◆グランドデザイン答申

【26】

●2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（文部科学省資料より要約）

I. 目指すべき姿→学修者本位への教育の転換

●必要とされる人材像

- 普遍的な知識・理解と汎用的技能→文理融合的に獲得
- 論理的思考力をもって社会を改善していく資質

●学習者本位の教育への転換

- 学修成果の可視化
- 生涯学び続けられる多様で柔軟な仕組みと流動性

★2040年ごろの社会の変化

SDGs、Society5.0、第4次産業革命、人生100年時代、グローバル化、地域創生

●社会との関係

- 知識の共通基盤：新たな社会・経済システムの提案、成果還元
- 研究力の強化：イノベーション創出、科学技術の発展に寄与
- 産業界との協力・連携：雇用・働き方と学びのマッチング
- 地域への貢献：個人の価値観を尊重する社会づくりに貢献

Ⅱ. 教育研究体制→多様性と柔軟性の確保

●多様な学生

- リカレント教育
- 国際展開

●多様な教員

- 実務家、若手、女性、外国籍

●教育プログラム

- 学位プログラム
- ICT活用

●ガバナンス

- 経営力強化
- 大学連携・統合

●「強み」の強化

- 人材養成の観点から特色を明確化

Ⅲ. 教育の質保証と情報公開

●教学マネジメントの確立

- 学修成果の可視化と情報公開
- 設置基準の見直し
- 認証評価制度の充実

Ⅳ. 18歳人口減少を踏まえた規模や地域配置

●進学者数とそれを踏まえた規模

- 地域における高等教育
- 地域連携プラットフォーム
- 国公私の役割

Ⅴ. 各機関の役割→多様な機関による多様な教育

- 各学校種における特有の課題の検討
- 高等教育機関の間の流動性→より多様なキャリアパスの実現

Ⅵ. 投資→コストの可視化と支援の拡充

- 公的支援の充実に加え、民間投資や寄附（財源の多様化）
- 教育・研究コストの可視化→社会経済効果の提示、理解促進

◆これからの社会創造に必要なとなる資質を育成するための変革が求められる

Ⅱ-10◆答申における「創造力」

【27】

●資質・能力についての言及がある答申には「創造力」の重要性が登場

●2008年「学士課程教育の構築に向けて」（学士課程答申）

●国際的な動向

グローバルな知識基盤社会や学習社会において、学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や**創造性**、生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培うことが重視されつつある。

●各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針

①知識・理解、②汎用的技能…1)コミュニケーション・スキル、2)数量的スキル、3)情報リテラシー、4)論理的思考力、5)問題解決力、③態度・志向性…1)自己管理能力、2)チームワーク、リーダーシップ、3)倫理観、4)市民としての社会的責任、5)生涯学習力、④統合的な学習経験と**創造的思考力**…これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

●2014年「高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」

●大学教育の質的転換の断行

大学教育の質的転換を進める上では、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら成長する場を創ることが重要である。このため、年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等にかかわらず、多様な背景を持った教職員や学生を受け入れることによって、大学の構成員の多様化を進め、主体性を持って多様な人々と協働するとともに**創造性を磨くことのできる学習環境**を実現するとともに、多様な学生に対応できる教育カリキュラムを用意しなければならない。

●2018年「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（グランドデザイン答申）

●2040年に必要とされる人材

予測不可能な時代の到来を見据えた場合、…（中略）…「21世紀型市民」が多く誕生し、変化を受容し、ジレンマを克服しつつ、更に**新しい価値を創造**しながら、様々な分野で多様性を持って活躍していることが必要である。

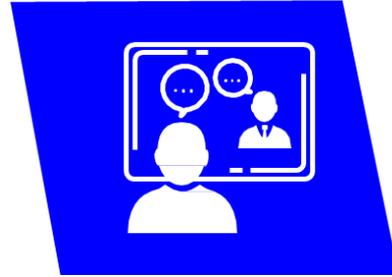
●教育研究体制

個々人がその可能性を最大限に活かし、AI時代やグローバル時代を生きていく能力を獲得するためには、画一的な、教育を提供する側が考える教育から脱却し、高等教育は「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより**新たな価値が創造される場**」＝「多様な価値観が集まるキャンパス」になることが必要である。

●大学の多様な「強み」の強化

「学術の中心」である大学は、現時点の「強み」の維持・強化にとどまることなく、不断の大学改革により、新たな「強み」を持続的に生み出していくとともに、**次代の社会を牽引するような新たな価値を創造**することが期待されている。

◆グランドデザイン答申は、価値を創造する場としての大学の役割を強調



Part

III

大学教育の変化

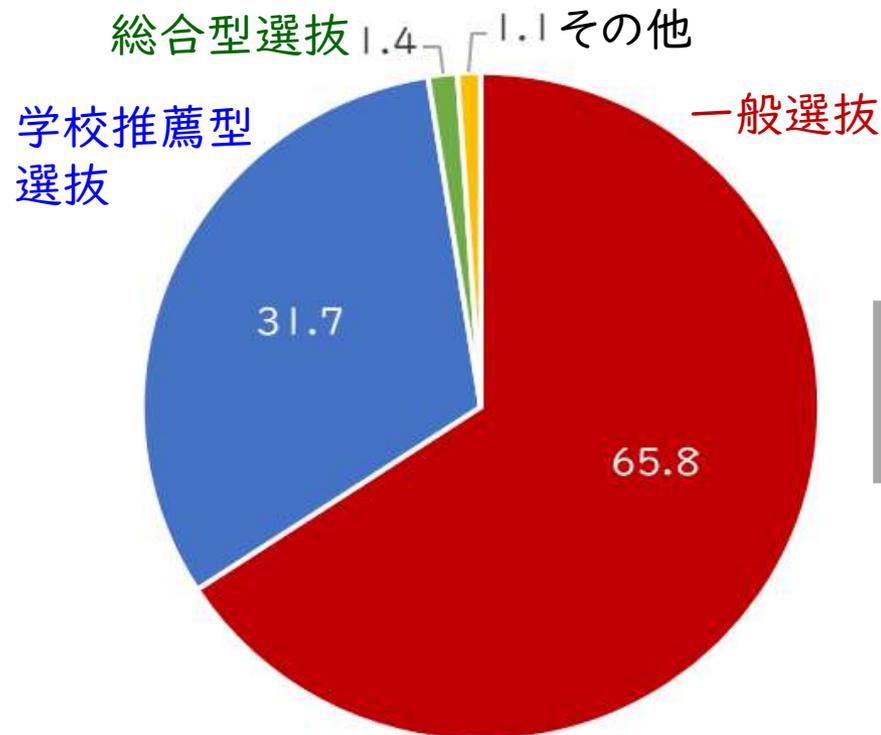
Ⅲ-1◆入学者選抜の変化

【29】

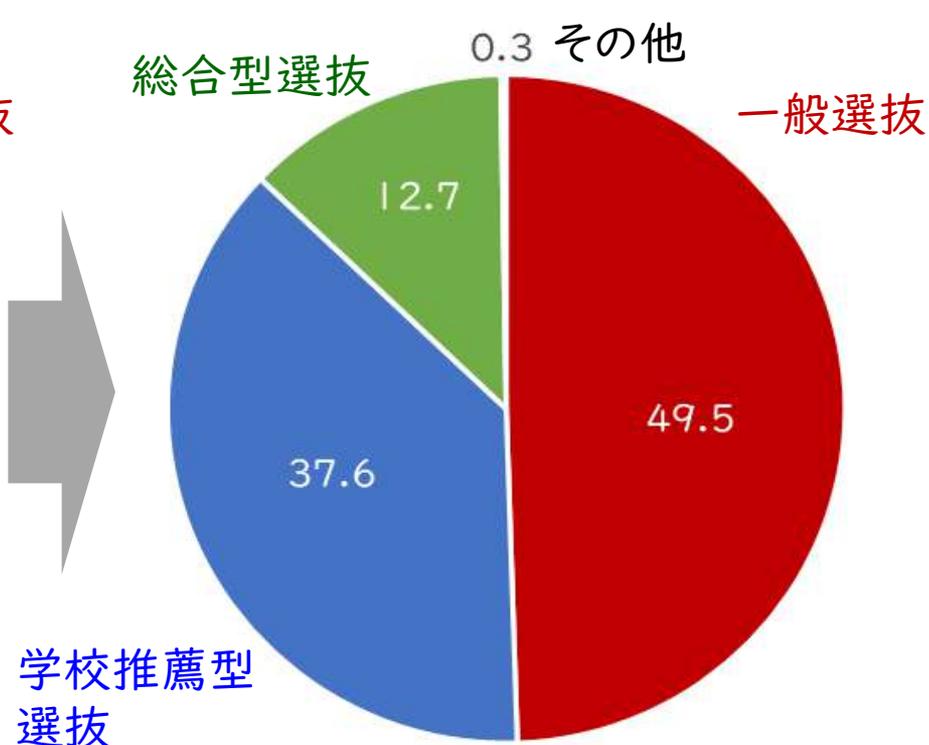
●入学者の約半数が「学校推薦型選抜＋総合型選抜」で進学している

◆入学者の内訳

2000年



2021年



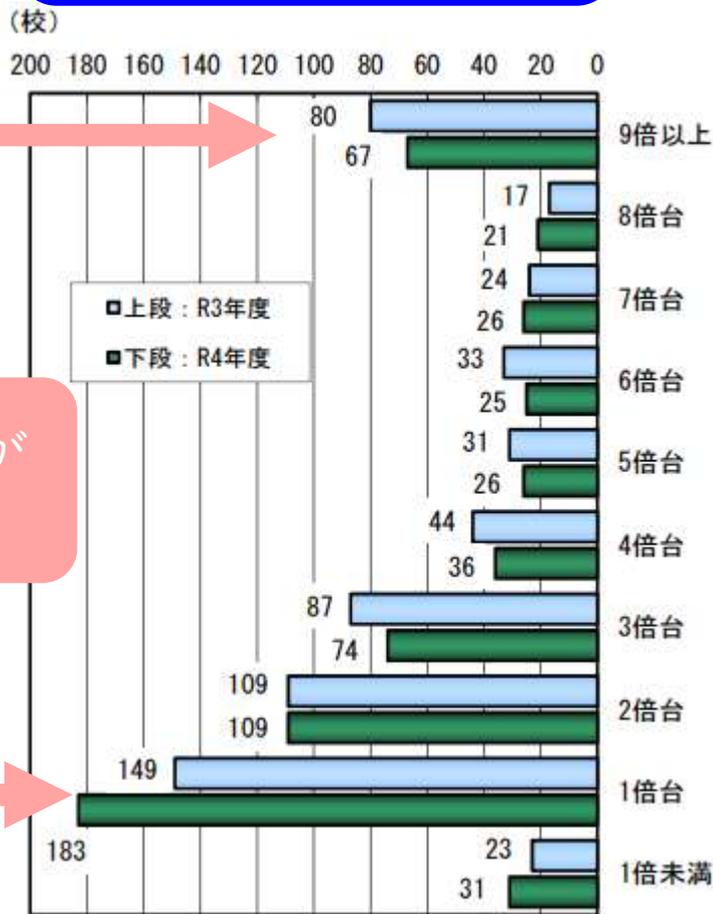
※文部科学省「令和3年度国公立大学入学選抜実施状況」

◆私立大学に限ると、6割弱が「学校推薦型選抜＋総合型選抜」で進学

Ⅲ-2◆私立大学の入試状況

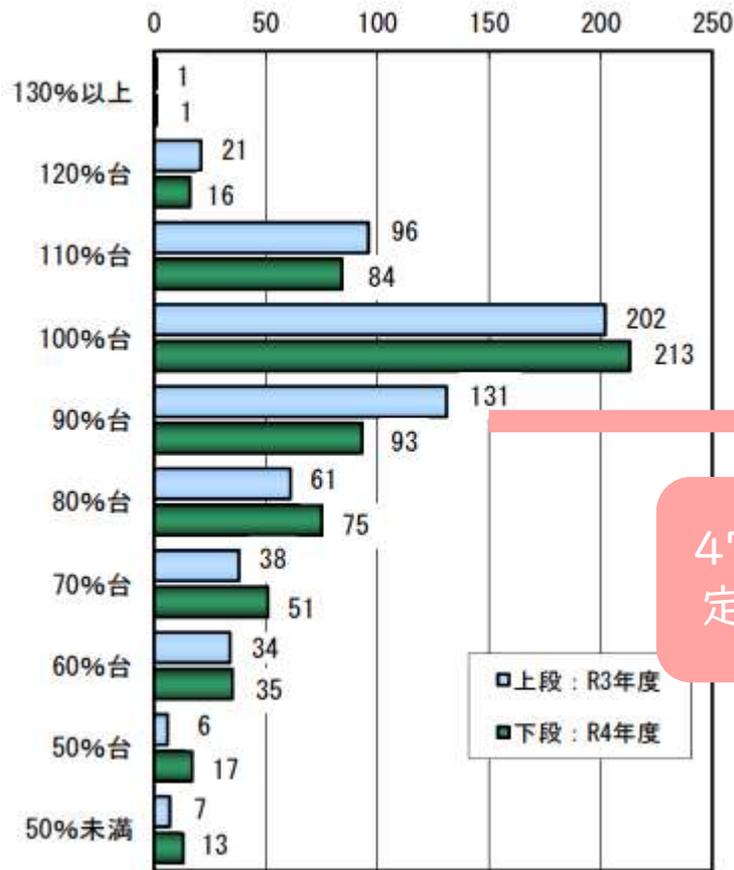
●大学によって入試状況にバラツキが大きく、志願倍率は2極化が進む

志願倍率の分布



2極化が
進む

入学定員充足率の分布



47.5%が
定員割れ

※日本私立学校振興・共済事業団「令和4（2022）年度 私立大学・短期大学等入学志願動向」より転載

◆入学者の獲得競争はますます激しくなることが予想される

Ⅲ-3◆入試の好事例

【31】

●「高校での学び」を「大学での学び」につなげる入試が導入され始めている

好事例の選定区分

- ア** 総合的な英語力の評価・育成
- イ** 思考力・判断力・表現力の評価・育成
- ウ** 多様な背景を持った学生の受入れへの配慮
- エ** 高校との連携をはじめとする高大接続改革の推進
- オ** 文理融合の推進やその他の好事例

を選定の対象項目として
設定しました。



●さらに、左記の項目について、学力の3要素を適切に評価・判定するとともに、高校での学びを大学での学びに繋げていくような入試が行われているかという視点から、例えば…

- ❑ 求める能力や測定方法を明示し、受験生に対して、高校でどのような学習や活動をすればよいのか分かりやすく説明しているか
- ❑ 求める能力を実際に測定できていることを示す検証結果（エビデンス）があるか
- ❑ マンパワー等を含めて無理なく継続できる体制・仕組みとなっているか
- ❑ 新規性・先進性（従来の取組の発展形を含む）があり、他大学の参考となり得る工夫が見られるか
- ❑ 入試だけでなく入試前後の教育を含め、高校での学びから入学後の学びまでが有機的に繋がっているか

●令和3年度好事例として収録された大学

北海道大学「総合型選抜」
小樽商科大学「グローバル総合入試」
宮城大学「総合型選抜」
東京外国語大学「英語スピーキング試験」
東洋大学「英語外部試験の利用」
金沢大学「KUGS特別入試」「超然特別入試」

藤田医科大学「ふじた未来入試」「一般入試」
京都大学「特色入試」
京都工芸繊維大学「ダビンチ入試」
奈良女子大学「探求力入試『Q』」
島根大学「へるん入試」
高知大学「総合型選抜Ⅰ（医学科）」

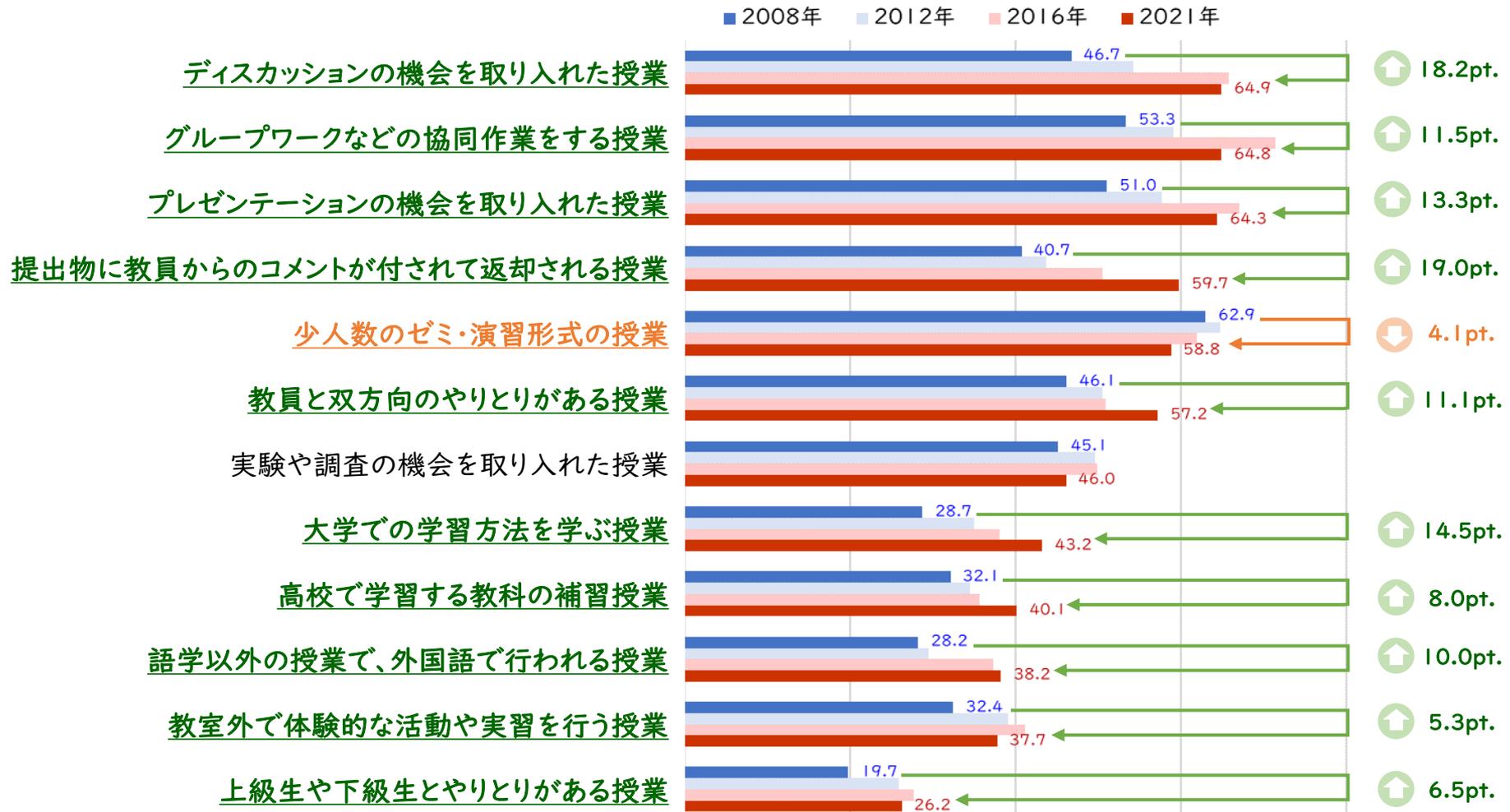
長崎大学「一般選抜」
国立六大学連携コンソーシアム
「ペーパーインタビュー」
熊本大学「肥後時修館」
東洋大学
福岡県立大学

Ⅲ-4◆大学の授業の形態

【32】

●対話的・探究的な学び（アクティブ・ラーニング）の機会は広がっている

◆あなたはこれまで大学で、次のような授業を経験しましたか。 ※「よくあった」+「ある程度あった」(%)



※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

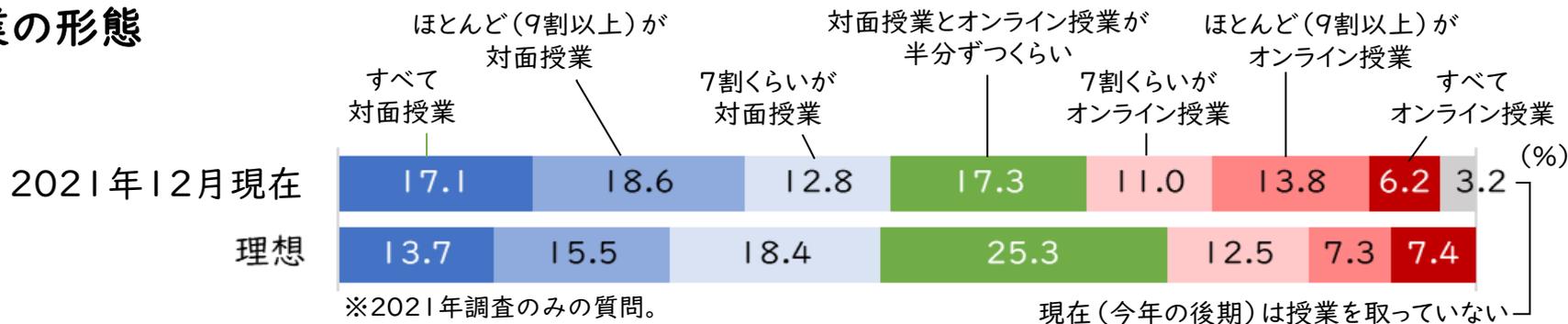
Ⅲ-5◆オンライン授業

【33】

●現在の授業形態は、「対面が多い」5割、「オンラインが多い」3割

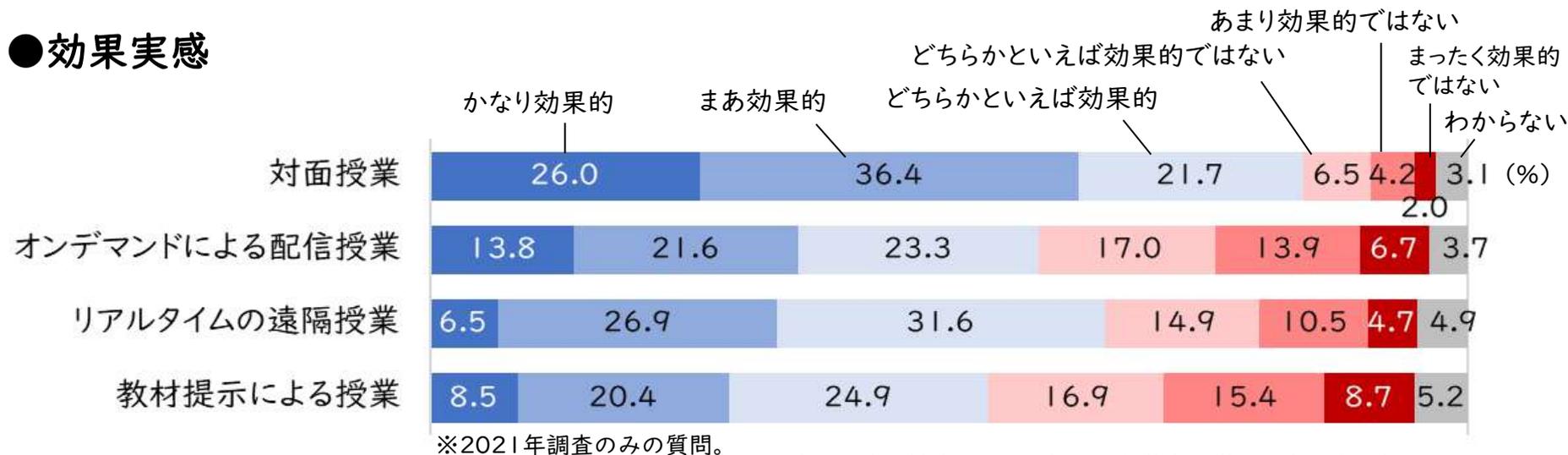
- ◆（現在）対面授業とオンライン授業は、どれくらいの割合で行われていますか。
- ◆（理想）対面授業とオンライン授業は、どれくらいの割合で行われるのが良いと思いますか。

●授業の形態



- ◆次のような授業の形態は、学習成果を高めるのにどれくらい効果的だと思いますか。

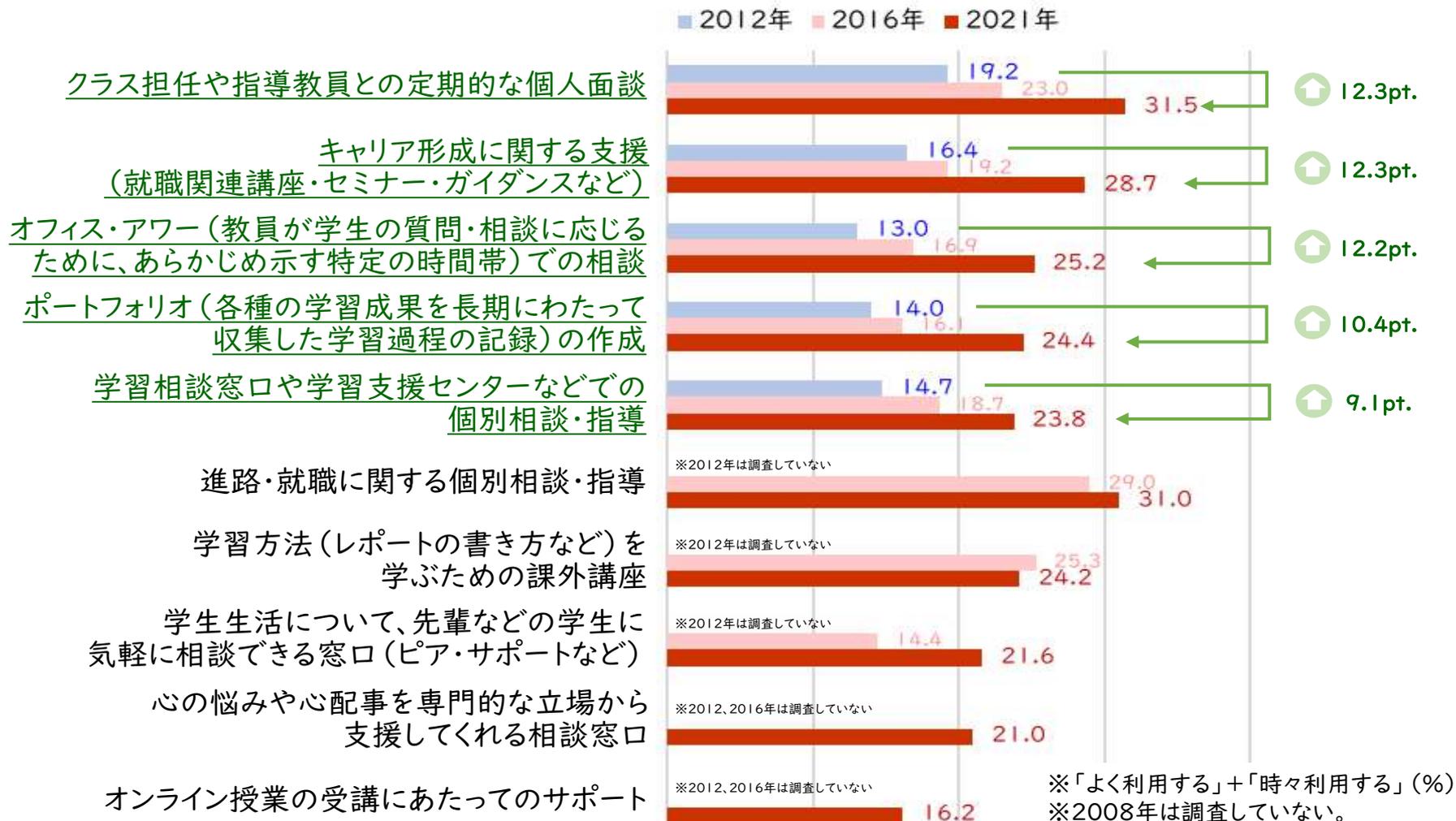
●効果実感



Ⅲ-6◆大学による支援

●大学が準備する各種の支援や相談を利用する割合が高まっている

◆あなたは、次のような学生に対する支援環境をどの程度利用していますか。



Ⅲ-7◆3つの方針に基づいた点検

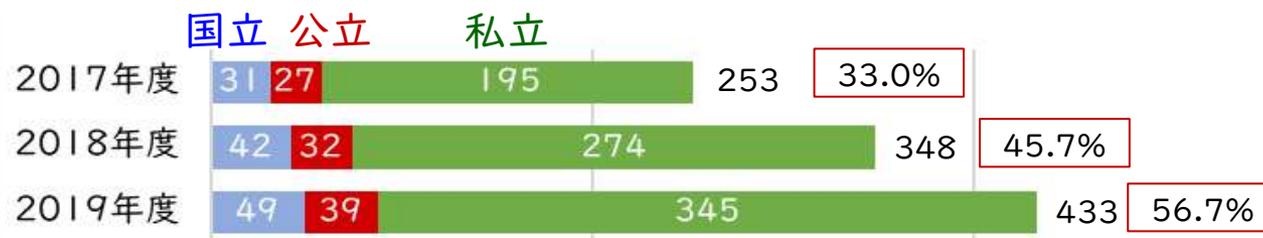
【35】

●3ポリシーの運用が進み、8割の大学は達成状況を点検・評価している

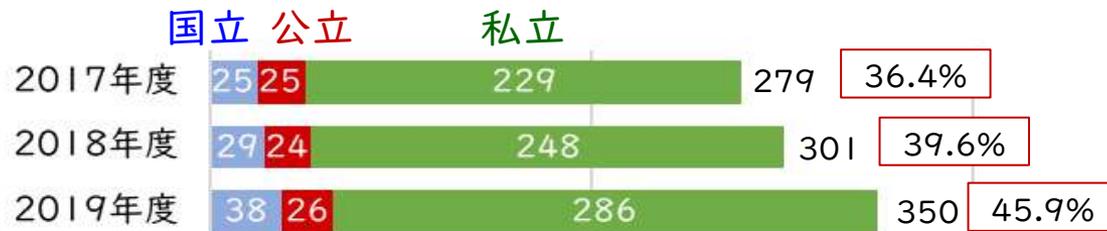
◆【大学全体】 3つの方針の達成状況を点検・評価している



◆【大学全体】 3つの方針に基づく教育の成果を点検・評価するための、学位を与える課程共通の考え方や尺度を策定している



◆【大学全体】 点検・評価に当たって学外の者が参画して意見を取り入れる機会を設けている



Ⅲ-8◆カリキュラム編成上の工夫

【36】

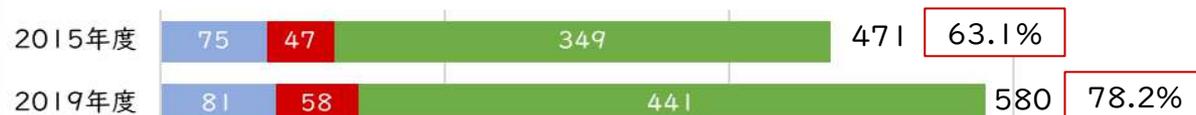
●カリキュラムを編成する上での具体的な取り組みが進んでいる

◆学部段階

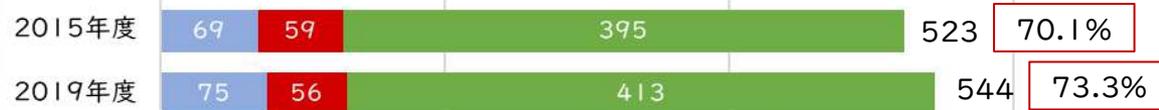
教養教育と専門教育の連携に関する検討の実施と検討結果の反映



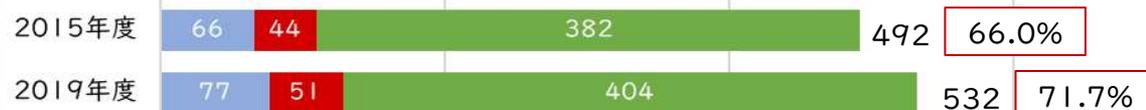
履修系統図(カリキュラムマップ、カリキュラムチャート)の活用



能動的学修(アクティブ・ラーニング)を効果的にカリキュラムに組み込むための検討を行っている



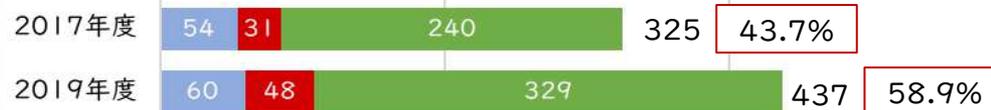
能動的学修(アクティブ・ラーニング)を取り入れた授業科目の増加を図る



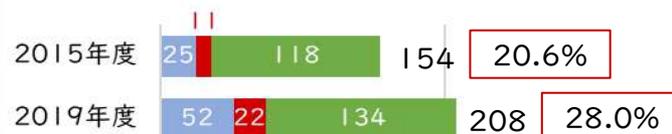
大学全体で定める人材養成目的や学位授与方針等とカリキュラムの整合性を考慮



カリキュラム編成に当たり、実務経験のある教員が参画する仕組みを設けている



カリキュラム編成に当たり、企業等と連携する仕組みを設けている



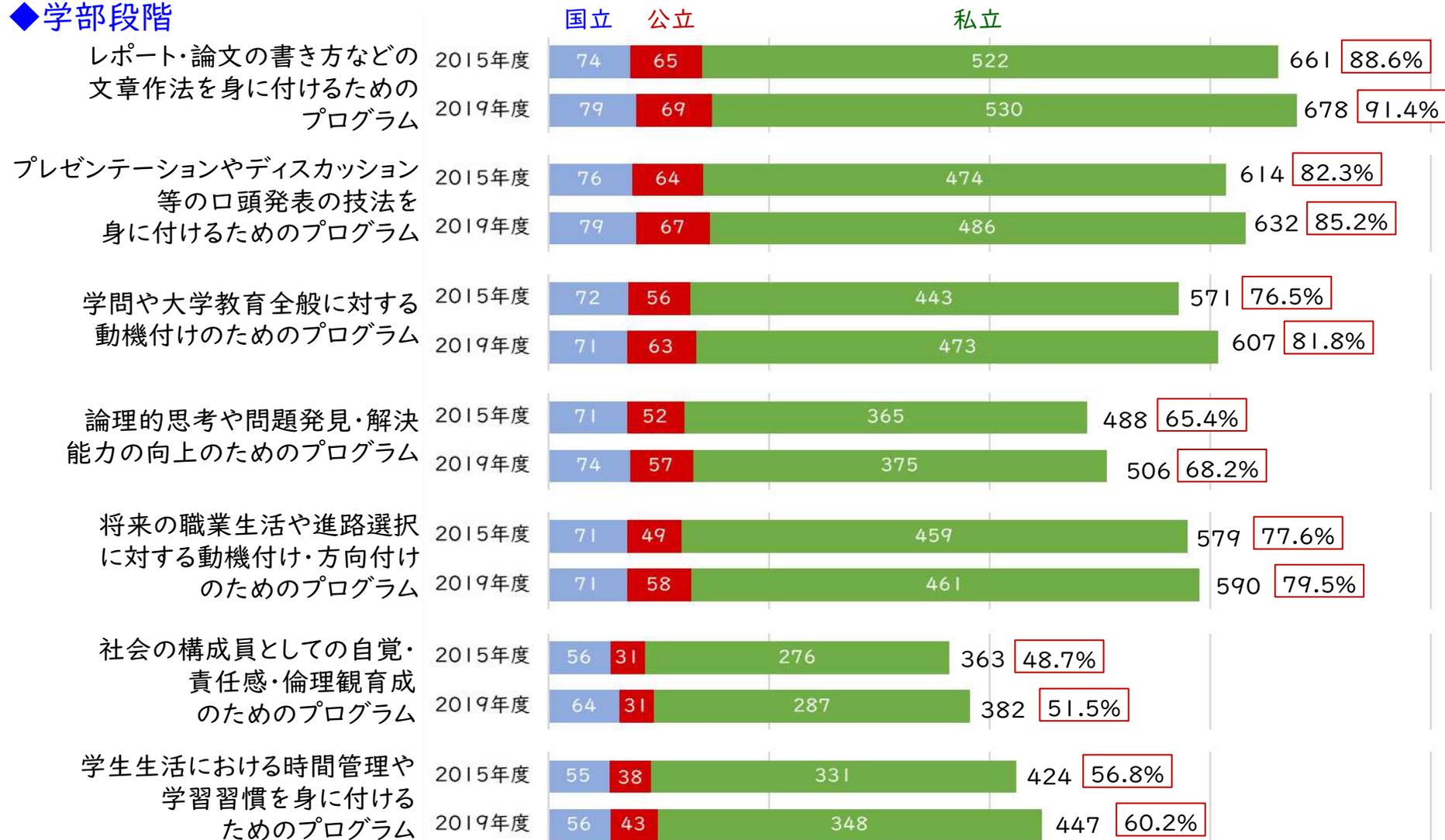
※文部科学省「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況調査」2021年

Ⅲ-9◆初年次教育の実施状況

【37】

●ほとんどの大学で初年次教育が行われ、その比率はさらに増えている

◆学部段階



※文部科学省「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況調査」2021年

Ⅲ-10◆学修成果の可視化

【38】

●学修行動の把握は8割超、学修成果の把握は6割超の大学が行っている

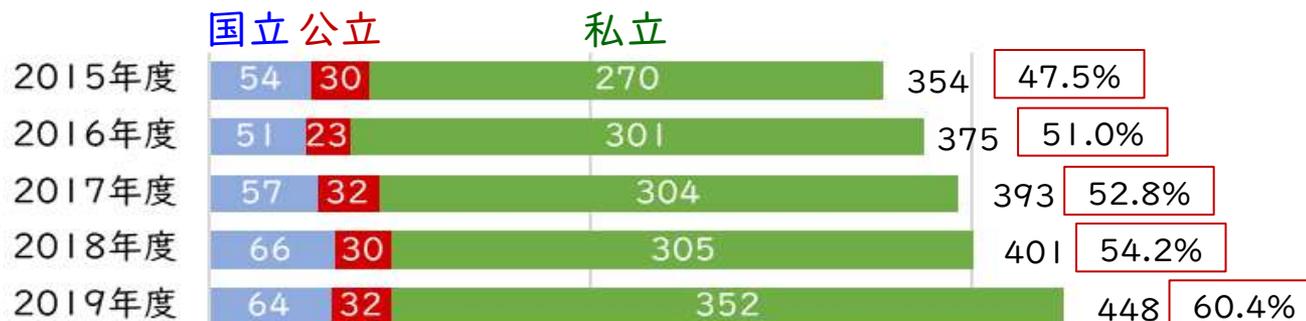
◆【学部段階】 学生の学修時間や学修行動の把握を行っている



◆【学部段階】 学生の学修意欲の把握を行っている



◆【学部段階】 課程を通じた学生の学修成果の把握を行っている





Part

IV

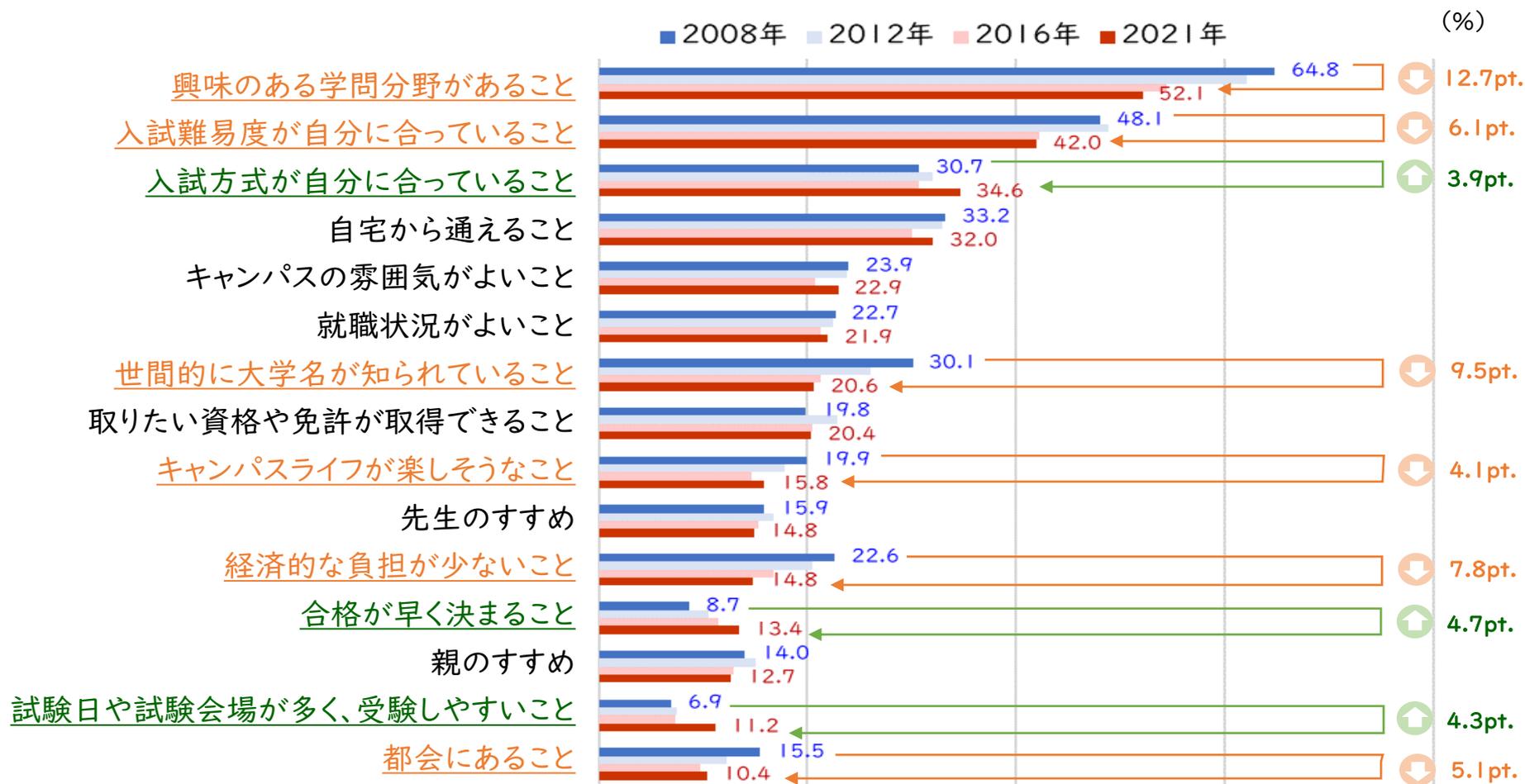
大学生の意識や行動

IV-1 ◆大学進学理由

【40】

● 「興味のある学問分野」「大学名が知られている」が減少

◆受験する大学・学部を決める際に重視した点について、あてはまるものをお選びください。



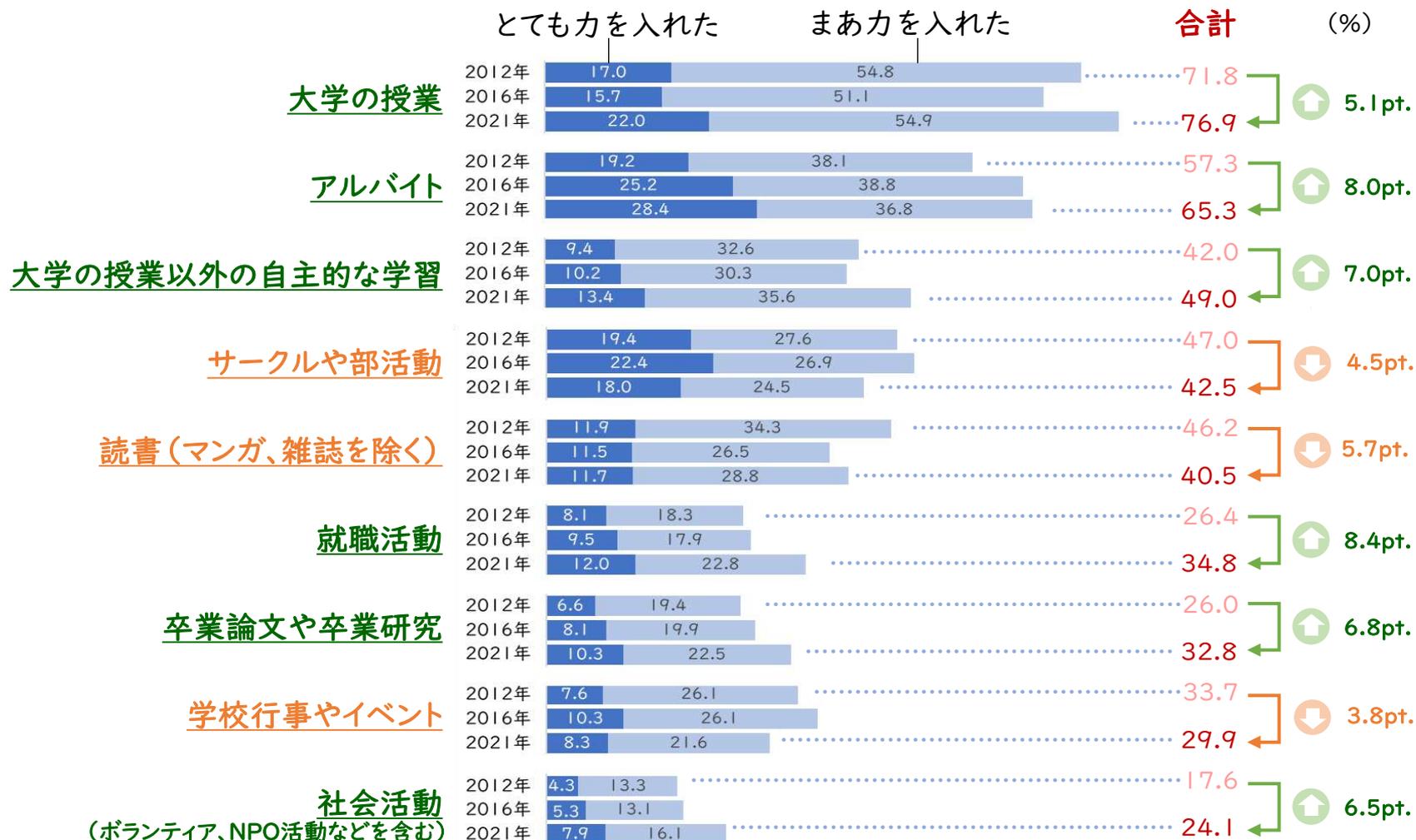
※4時点で比較できる項目のみを抜粋、2012年と2016年の数値の表記は省略した
 ※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

IV-2◆力を入れたこと

【41】

●「授業」「自主的な学習」は増加、「サークルや部活動」は減少

◆あなたは次の項目について、これまでの大学生活の中で、どのくらい力を入れてきましたか。



※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

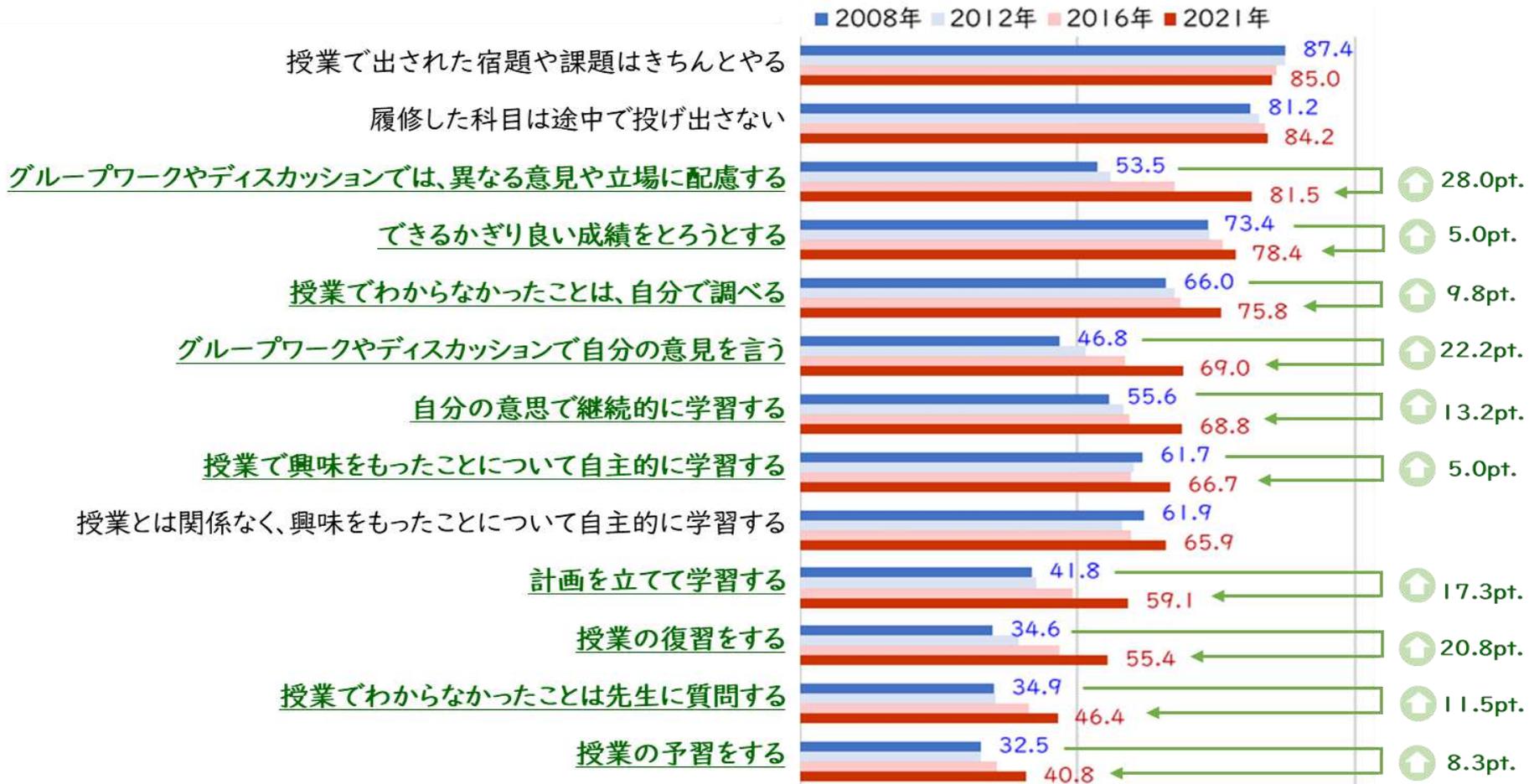
IV-3◆授業に対する取り組み

【42】

●対話的・探究的な学びへの積極性が高まり、学習態度はまじめに

◆あなたは大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか。

※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」(%)



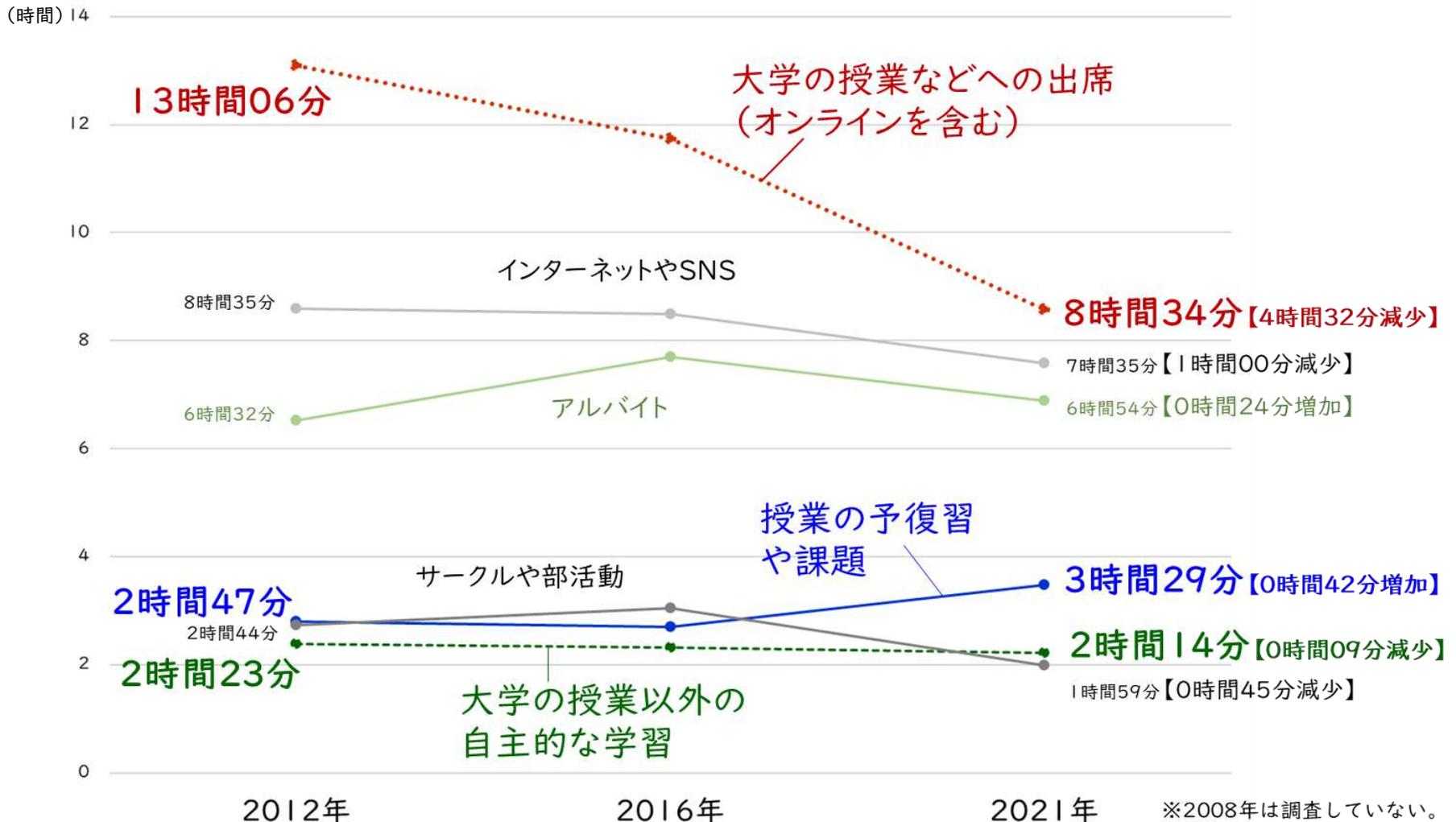
※4時点で比較できる項目のみを抜粋、2012年と2016年の数値の表記は省略した

※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

IV-4◆生活時間（1週間あたり）

●授業時間が大きく減少する一方で、課題の時間は増加している

◆次の項目は1週間（月曜日～日曜日）で何時間くらいになりますか。



※2008年は調査していない。

IV-5◆学内の友人関係

【44】

●2016年→21年にかけて、すべての項目で「いない」「1人」が増加

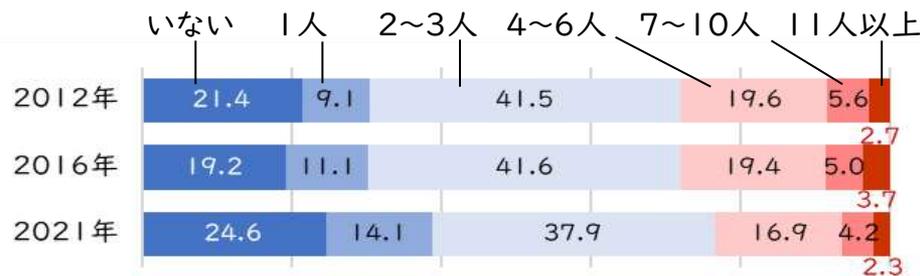
◆(大学内) 次のようなことをする友だちは全部で何人くらいいますか。

(%)

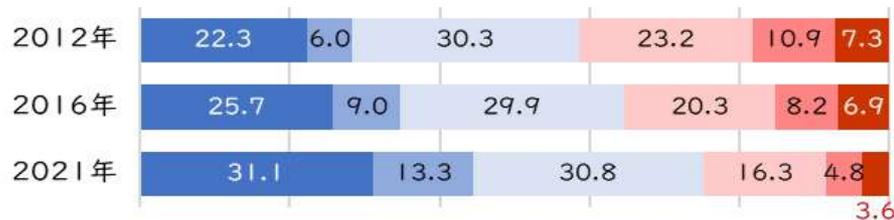
話をしたり一緒に遊んだりする友だち



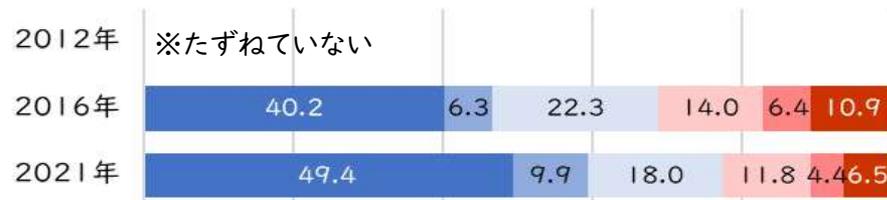
悩み事を相談できる友だち



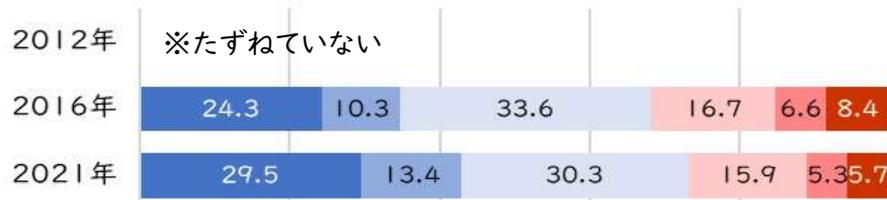
学習や広く社会の課題などについて議論をする友だち



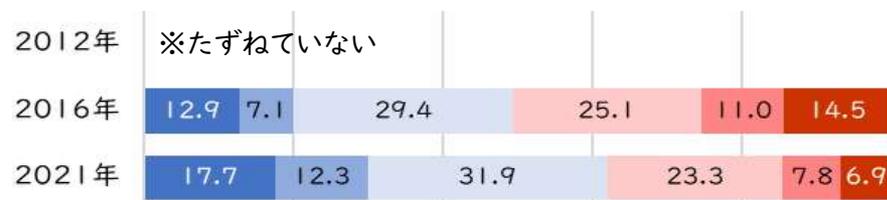
学習やスポーツで競い合う友だち



尊敬できる友だち



情報交換(授業や就職活動などについて)する友だち



※2008年は調査していない

※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

IV-6◆身についた資質・能力

【45】

●対話的・探究的な学びで身につく資質・能力の自己評価が高まっている

◆次のようなことについて、大学生生活全体を通じてどの程度身についたと思いますか。



※2012年、2016年の結果は、図から省略した

※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

IV-7◆大学教育観

【46】

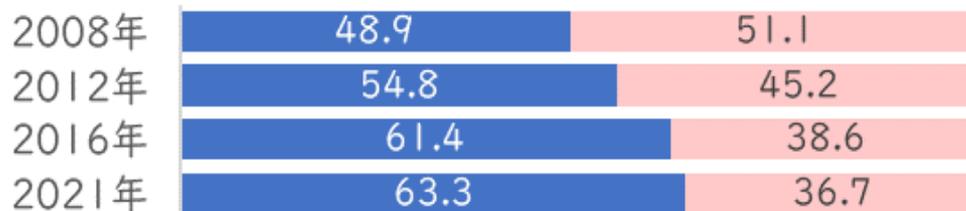
●「単位を楽に」という意見が増加、大学に指導を求める傾向も強まる

◆大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。

①単位取得

【A】あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい

【B】単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい

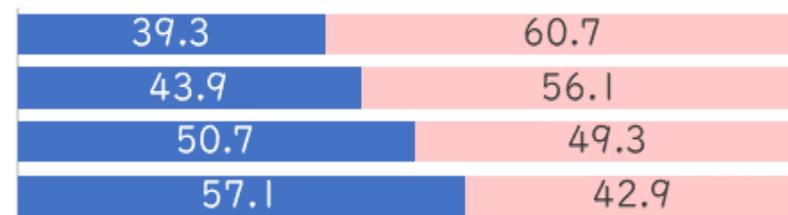


②学習方法

(%)

【A】大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい

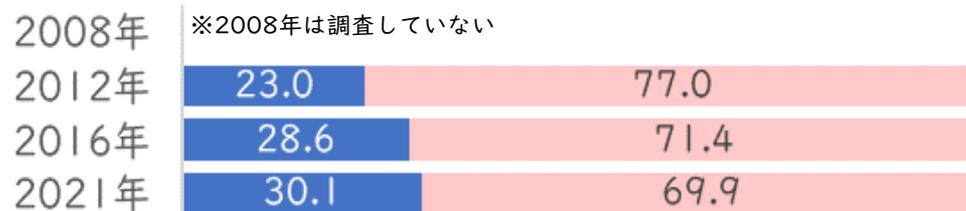
【B】大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい



③責任

【A】学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、大学の教育の責任だ

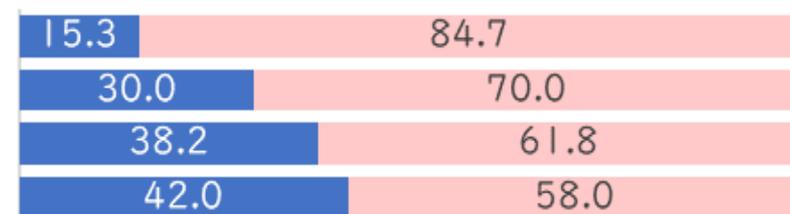
【B】学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、学生自身の責任だ



④学生生活

【A】学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい

【B】学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい



※2008年→21年にかけて変化があったものを中心に抜粋して示した

IV-8◆保護者との関係

【47】

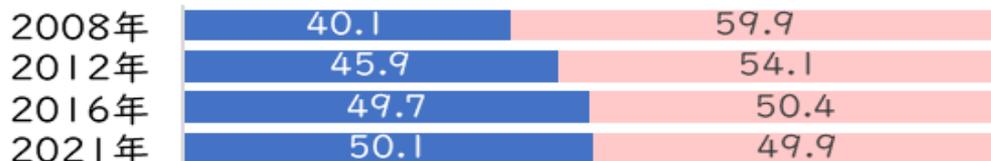
●困ったとき「保護者が助けてくれる」が2008→21年で約20pt.増加

◆あなたと保護者との関係について、もっとも近いもの1つをお選びください。

①物事の決定

【A】保護者のアドバイスや意見に従うことが多い

【B】なにごと自分で決めることが多い

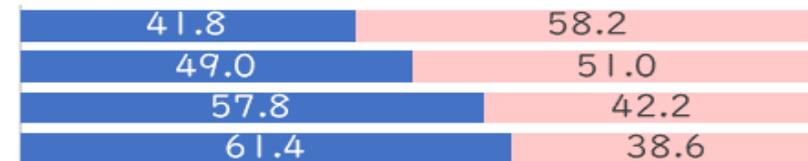


②困ったとき

(%)

【A】困ったことがあると、保護者が助けてくれる

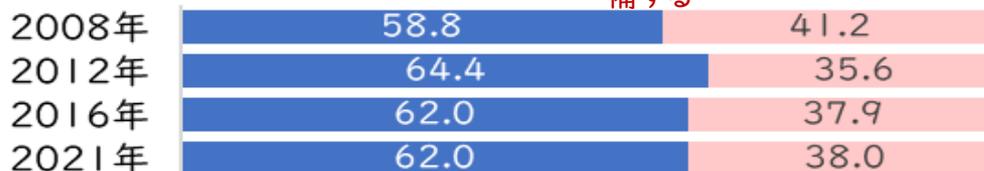
【B】困ったことがあると、自分で解決する



③お金が必要なとき

【A】お金が必要になったら、保護者が援助してくれる

【B】お金が必要になったら、アルバイトなどして自分で準備する

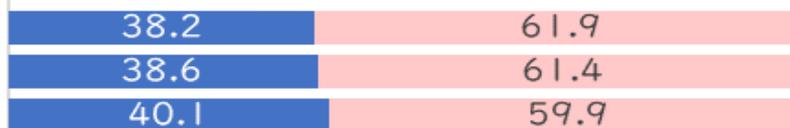


④進路や就職に関する相談

【A】進路や就職に関して保護者の方から希望や意見を言われる

【B】進路や就職に関して自分の方から保護者に話をしたり、相談をする

※2008年はたずねていない

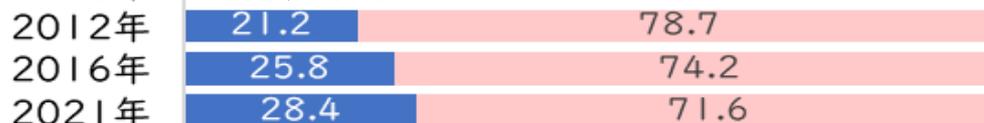


⑤進路や就職に関する決定

【A】進路や就職に関しては、保護者の意見を重視したい(した)

【B】進路や就職に関しては保護者の意見によらず自分の考えで決めたい(決めた)

※2008年はたずねていない



⑥小中学生の頃

【A】小中学生の頃、あなたが困ったとき、保護者がだいたい解決してくれた

【B】小中学生の頃、あなたが困ったとき、保護者は手を出さずに見守ってくれた

※2008年、2012年はたずねていない



IV-9◆大学満足度

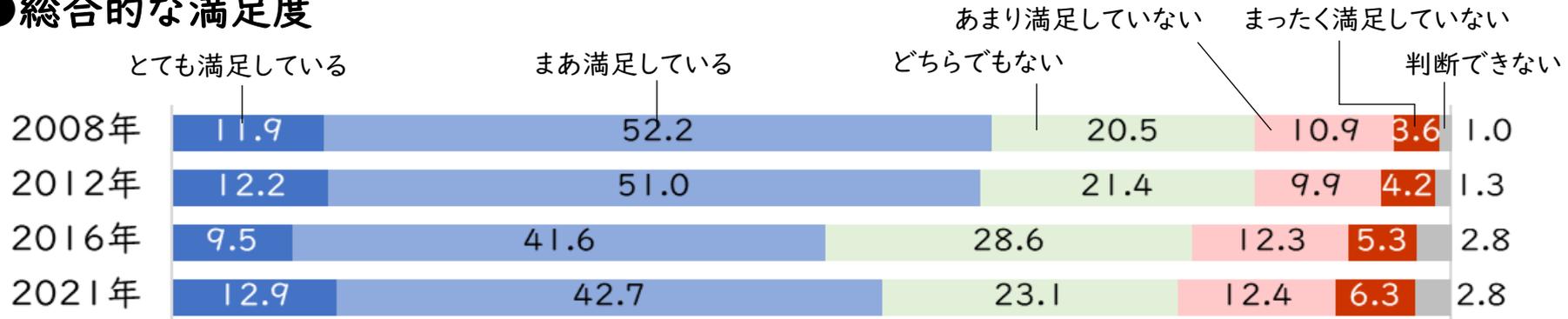
【48】

●2021年の「満足している」は55.6%、個別サービスの満足度は向上

◆現在通っている大学について、どのくらい満足していますか。

(%)

●総合的な満足度



●個別サービスの満足度

施設・設備 (図書館、ラーニングコモンズ、インターネットの利用など)

■ 2016年 ■ 2021年



※「とても満足している」+「まあ満足している」(%)。2008年、2012年は調査していない

※選択肢は、「とても満足している」「まあ満足している」「どちらでもない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」「判断できない」の6択

※ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習と生活実態調査」2021年

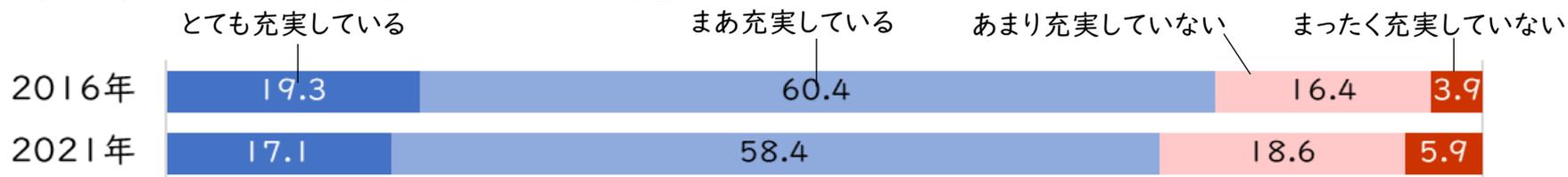
IV-10◆学びの充実度

【49】

●「充実している」は微減。2020年度入学生の充実度が低い

◆大学の各学年における学びの充実度について、あてはまるものを1つお選びください。

●総合的な学びの充実度「大学全体」 ※2008年、2012年は調査していない。 (％)



●学びの充実度（学年別）

※「とても充実している」+「まあ充実している」の合計(％)



●1年生のときの「学びの充実度」

※「とても充実している」+「まあ充実している」の合計(％)



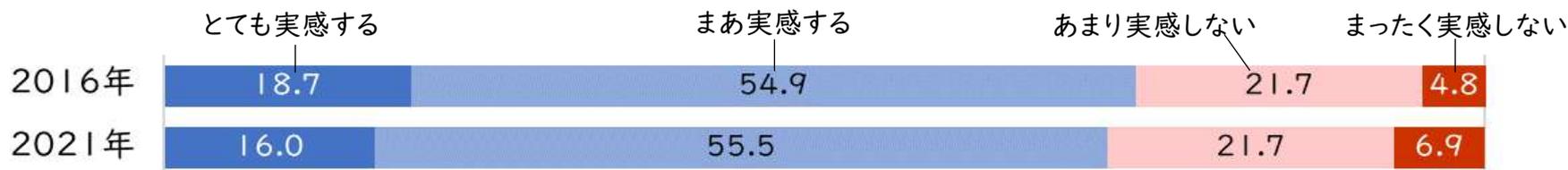
IV-11 ◆成長実感

【50】

●他の学年と比べて2020年度入学生の成長実感が低い

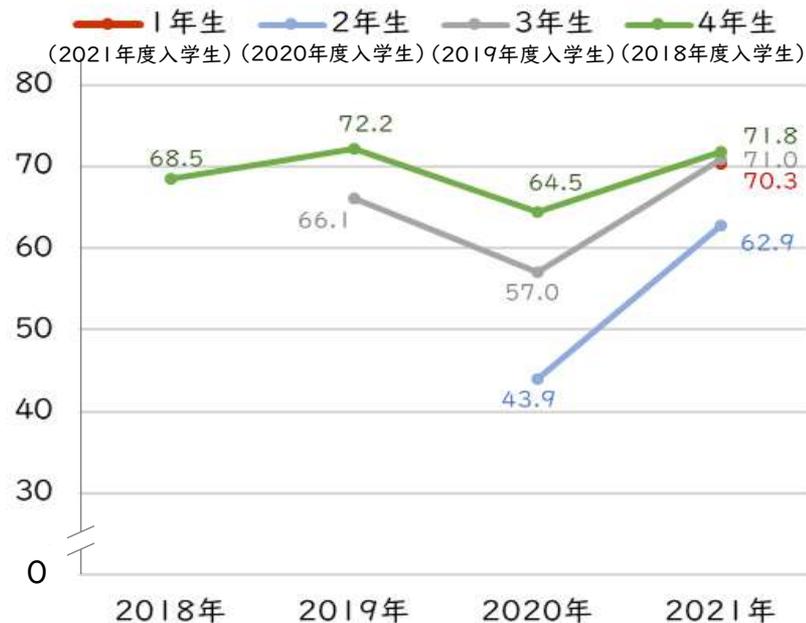
◆大学の各学年における成長実感について、あてはまるものを1つお選びください。

●成長実感「大学全体」 ※2008年、2012年は調査していない。 (%)



●成長実感（学年別）

※「とても実感する」+「まあ実感する」の合計 (%)



●1年生のときの「成長実感」

※「とても実感する」+「まあ実感する」の合計 (%)

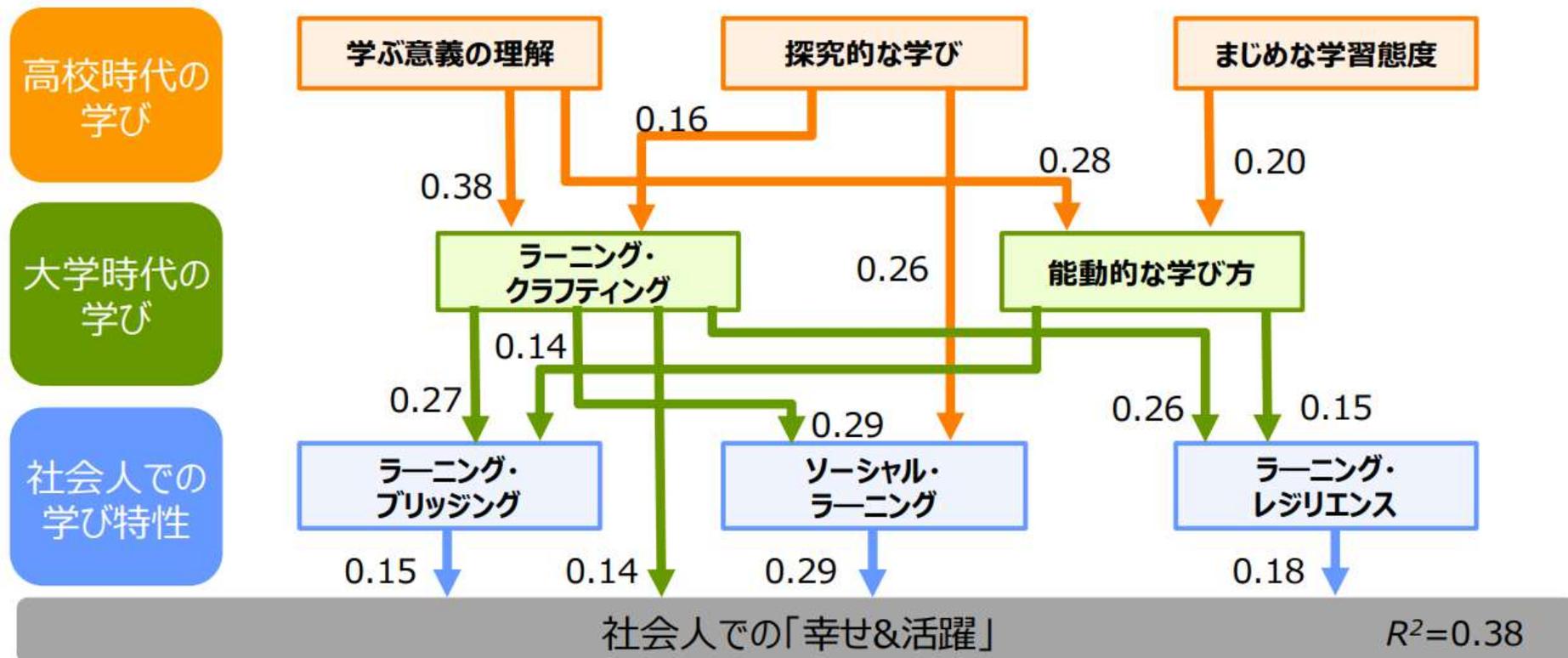


IV-12◆高大社での学びと「幸せな活躍」

【51】

●高校・大学・社会での学びは連続性があり、「幸せな活躍」につながっている

◆高大社での学びが社会人での「幸せな活躍」に与える影響(パス解析)



カイ2乗値: 267.06(df=15, p=0.000) GFI=0.972, CFI=0.971, RMSEA=0.092 ※パスの数値は標準化回帰係数、共分散、誤差間共分散は省略した

- ①高校-大学-社会での学びには連続性がある
- ②大学での「ラーニング・クラフティング」が社会人での「ソーシャル・ラーニング」「ラーニング・ブリッジング」「ラーニング・レジリエンス」につながり、幸せな活躍をもたらす

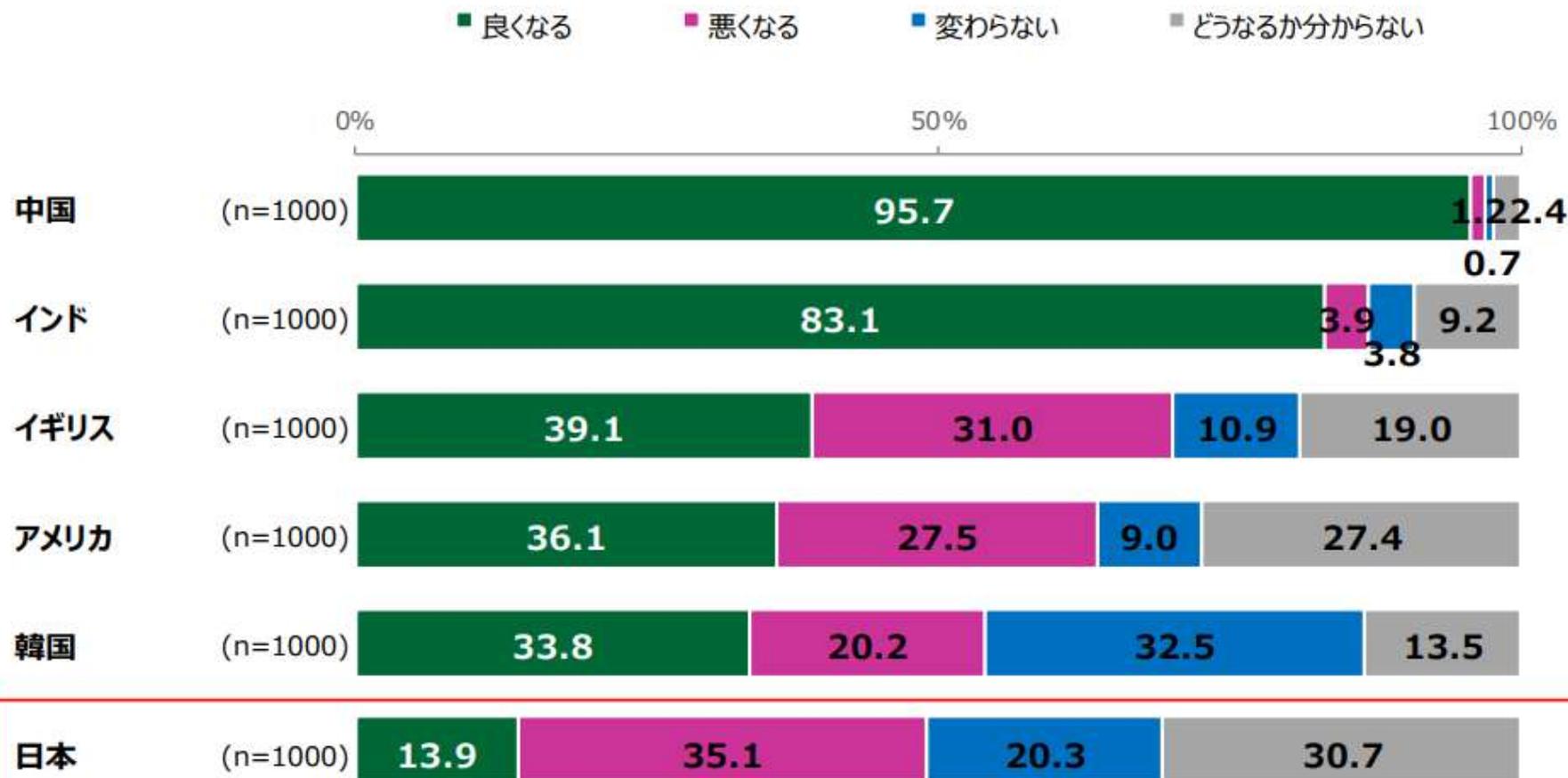
IV-13◆自国の将来に対する意識

【52】

●日本は「良くなる」が13.9%と、他の国に差をつけて6カ国中最下位

Q 自分の国の将来についてどう思っていますか。（各国n=1000）

※「良くなる」回答率が高い順に掲載



※日本財団「18歳意識調査『第46回 国や社会に対する意識(6カ国調査)』」2022年

IV-14◆自分と社会のかかわりについて

[53]

●「自分の行動で国や社会を変えられると思う」のは3割に満たない

Q 以下の項目に同意しますか。(各国n=1000)

※「はい」回答率を掲載

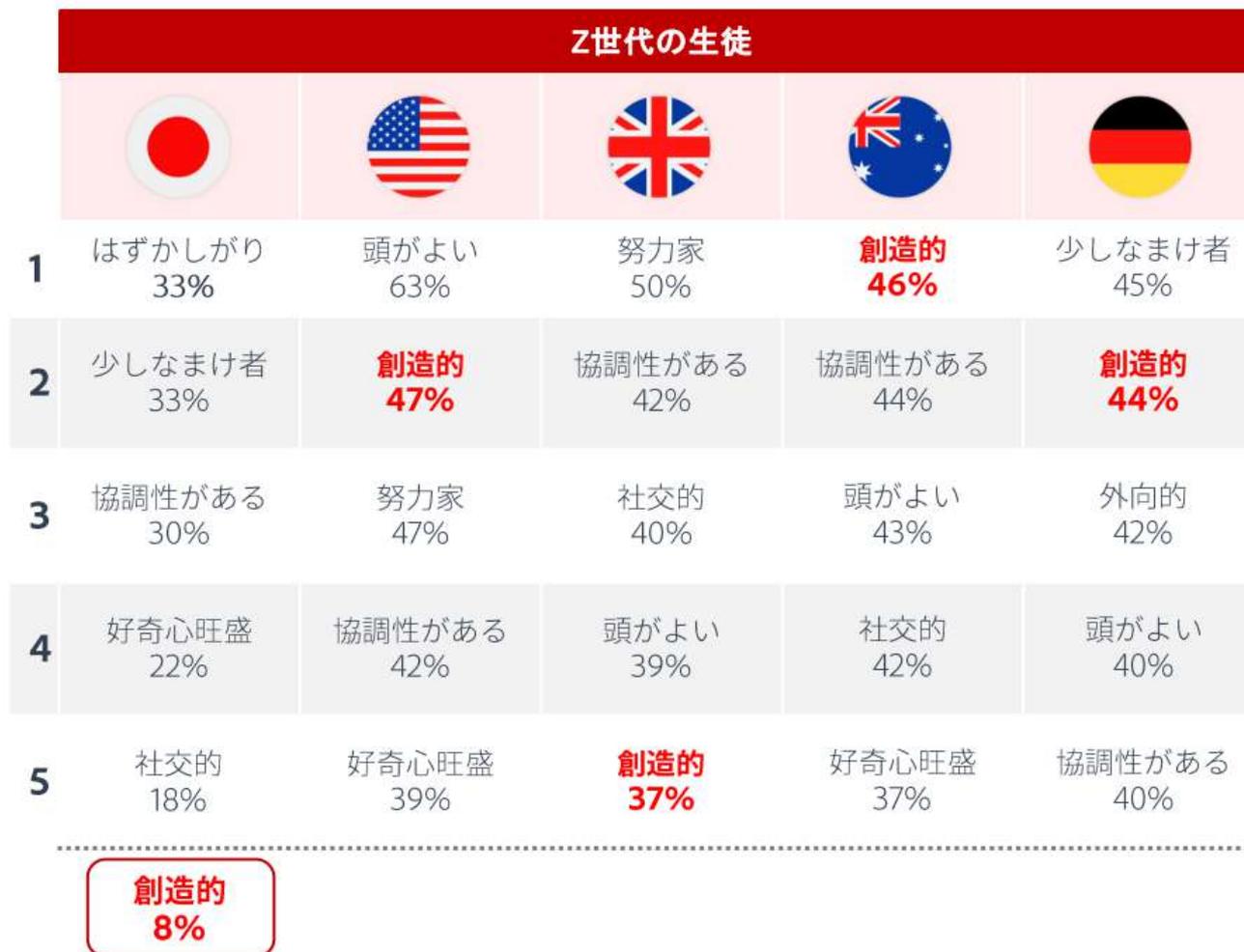
(単位：%)	自分は大人だと思 う	自分は責任があ る社会の一員だと思 う	自分の行動で、 国や社会を 変えられると思 う	国や社会に役立 つことをしたいと思 う	政治や選挙は、 自分の生活に 影響すると思 う	政治や選挙、 社会問題について、 関心がある
日本	27.3 6位	48.4 6位	26.9 6位	61.7 6位	60.9 5位	50.0 4位
アメリカ	85.7	77.1	58.5	73.0	64.0	51.7
イギリス	85.9 1位	79.9	50.6	71.2	61.4	49.7
中国	71.0	77.1	70.9	82.1	70.1 1位	66.1 1位
韓国	46.7	65.7	61.5	75.2	69.5	61.3
インド	83.7	82.8 1位	78.9 1位	92.6 1位	50.6	46.1

IV-15◆Z世代の特徴

【54】

●日本のZ世代は自分たちを「創造的」とはとらえていない

◆以下の中から（あなた/Z世代）に最も当てはまるものをお選びください。（複数回答）





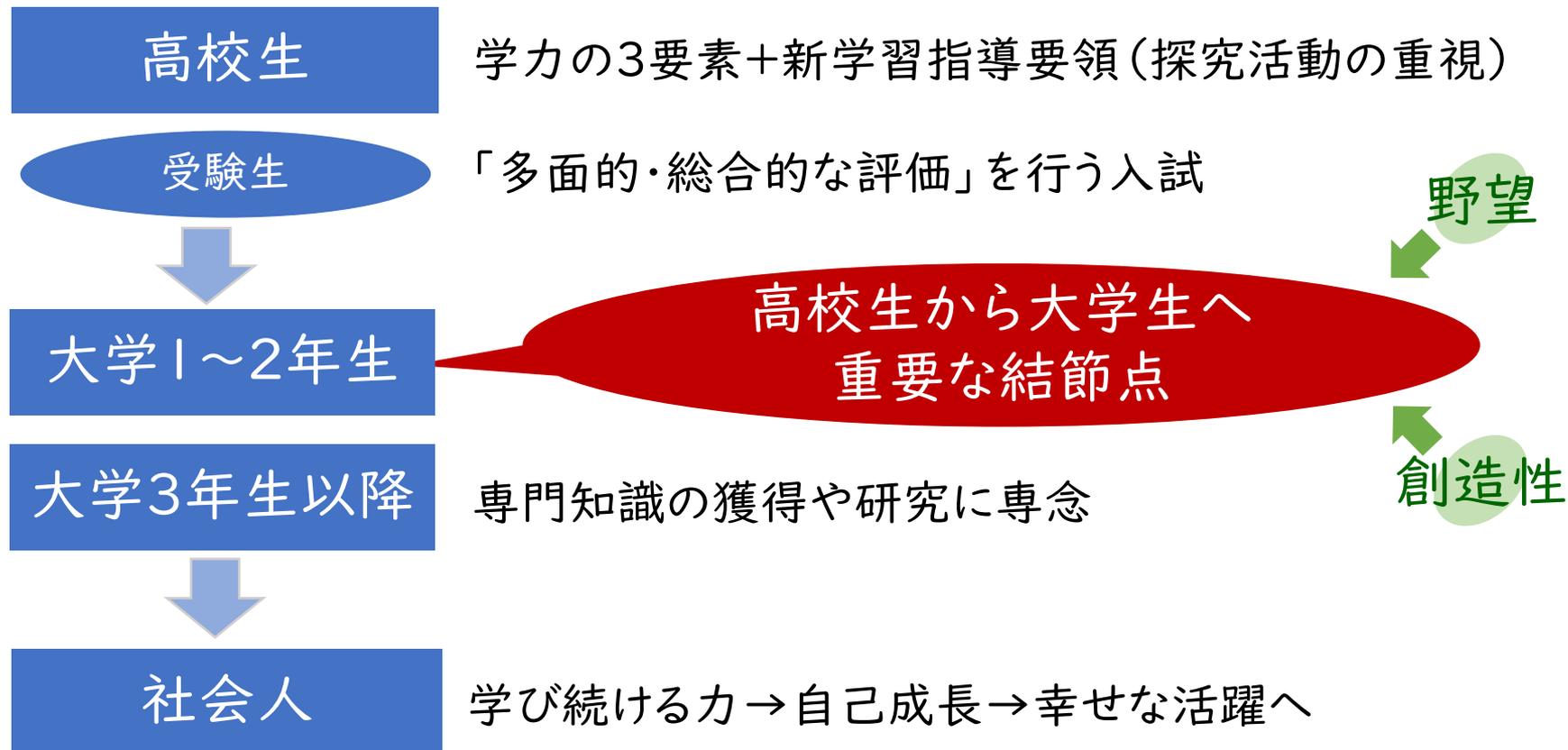
Part

V

最後に

V-1◆大学1～2年生の意味

- 高校から大学、社会での学びへと連続性をもちながらも
高校生までの学びのあり方を変革する重要な結節点

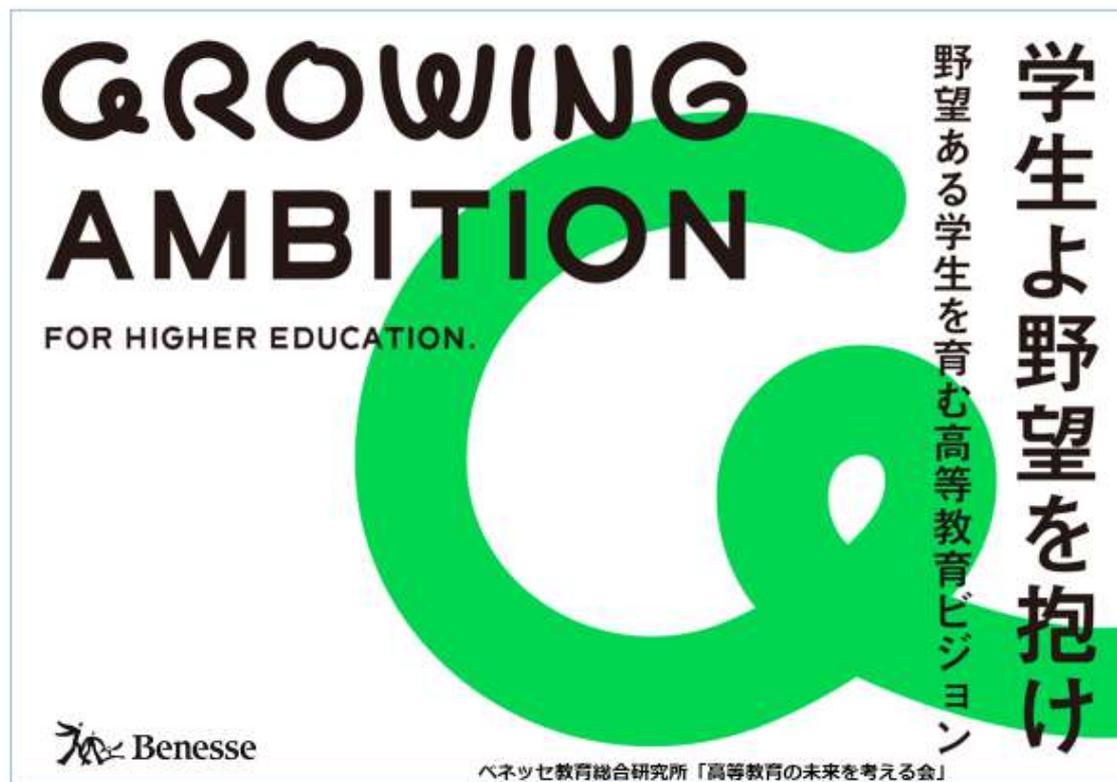


★社会や大学が、大学1～2年生にどんな環境を提供するかを考えたい

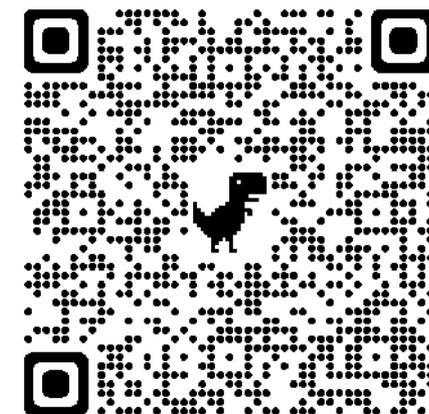
V-2◆「提言書」の紹介

【57】

大学生によりよい学び環境をつくるために、ベネッセ教育総合研究所「高等教育の未来を考える会」では大学向けに提言書をまとめました。



詳細はこちらから
ダウンロードできます



この【参考資料】とあわせてご覧ください
URL:<https://berd.benesse.jp/opinion/>

V-3◆「提言書」の主な内容

【58】

野望を抱く学生が育まれる場とは

野望とは、自分や社会の未来をつくる大志に満ちた夢を持つこと。

今を前提としない大きな未来にもひるまず挑戦する気持ち。

自分だけでなく社会の未来を共に創造し、未来に自分自身が歩む道をデザインする意志をもつこと。

大学への4つの提言



挑戦と観察を
繰り返して
創造性を育む学び場へ



社会と学生自身が
つながる経験を
提供する場へ



学生が自身で
決定し評価する経験が
できる場へ



未来を学生自身が
変える目標と
実感を育む場へ

これからの大学教育の役割

人生100年時代、18歳だけの大学ではなく、仕事と大学の往還ができるシステムを。

V-4 ◆ 「高等教育の未来を考える会」メンバー

【59】

座長：太刀川英輔氏（NOSIGNER代表）

- 木村健太氏（広尾学園中学校・高等学校医進・サイエンスコース統括長）
- キリーロバ・ナージャ氏（電通Bチーム クリエイティブ・ディレクター）
- 小林一木氏（ベネッセ教育総合研究所 教育研究推進室室長）
- 佐藤昌宏氏（デジタルハリウッド大学 教授・学長補佐）
- 塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館 准教授）
- 林寛平氏（信州大学大学院教育学研究科 准教授）
- 平岩国泰氏（学校法人新渡戸文化学園 理事長）
- 松本美奈氏（上智大学特任教授、一般社団法人Qラボ代表理事、ジャーナリスト）



学生よ野望を抱け
希望ある未来を描く大学教育ビジョン
【参考資料】

発行：2022年（令和4年）12月30日

編集・発行

ベネッセ教育総合研究所

高等教育の未来を考える会

〒206-8686 多摩市落合1-34